



深夜 特急

めざめれば別の国

作 渡辺えり

登場人物

石原与一（駅長）

田中かず夫（カエル2）

富士夫（駅員）

まさ子（カエル1）

北斗（イモ虫）・富士夫の幼年時代

その子（カエル3）

石原愛人

待ち人達（カエル達）

哲子（谷間の白ユリ）

さくら（野バラ1）

みずほ（野バラ2）

鈴木靖夫（蝶）

林（名もない花）

引越し屋の男

風の谷。舞台上に人間の心臓ほどの大きさの石が一つ置かれている。
息を切らして少年（石原富士夫）が走って来る。

少年 与一君！与一君！こっちこっち。

と地面に耳をあて眠るように瞳を閉じる。

少年 来るぞ、ジンジン響いてる。

ガタゴト、ガタゴト、ガタゴト……。

シュツシュツシュツシュツ

キーン！

与一君！こっちこっち！

現れたのは初老の男（石原与一）だった。

与一 判ってるよ富士夫君、そんなに急くなよ。

少年 ホラここ。

と又耳をあてる。

少年 来るよ、ジンジンジンジン ゴーゴーゴーゴー。

与一 来ないよ。

少年 来るさ、もう近くまで来てる。

与一 それじゃ危ないじゃないか。

少年 列車が来る前にあの藪に飛び込むんだ。みんなやってる。僕らのゲームなんだから。

与一 僕らって？

少年 君と僕のさ。

与一 やらんよそんな大人気ないこと。

と木の下に座り込む。

少年 あれ？音が消えた。

与一 幻聴さ。もうここには列車は来ない。線路は赤さびて、草も伸び放題だ。廃線になって五年も経つのに撤去するのも忘れたいらしい。あ……。

としゃがみ込む。

少年 何してるの？

与一 石をね、どけてるんだよ。子供のいたずらさ、石を並べて車輪に蹴散らされるのを見たいんだ。

少年 こんなでかい石まで……これじゃ事故になる。土手の下から並んで様子をうかがう子供達はどのぐらいここで待っていたんだろう。置いてけぼりの子供達、取り残された石ころ。もう誰もいない。さつきジンジン言ったがなあ。

与一 心臓の音だよ。走ったからゴトゴト鳴ったんだ。

少年 隕石だ！

与一 え？

少年 これ、流れ星が落ちたんだぜ。星の破片さ。

与一 子供が運んだただの石ころだろ？

少年 小さな星が爆発して、星の死体があちこちに散らばったんだ。これは心臓みたいな形をしてる。

与一 星の心臓かあ……星を轢いたことはなかったなあ……。

少年 人はいっぱい轢いたのかい？

与一 ああ、自殺者が七人、事故が三人……。

少年 全部与一君が？

与一 急には止まれないんだよ……。バラスの上にチョココンと直立した生首。雪の上に散らばった若い女

の人。夜中の心中死体。激突した自動車の中で血を吐く男。無残な死骸を見て失神した機関助手

もいたっけなあ……その度に公安室に出頭して調書を取られる。たまの休みもそれで潰れるんだ。

少年 犬や猫の時も？

与一 動物はそのまんまさ、しょつ中だもの時間通りに目的地に到着さ。鳥もずいぶん飛び込んでくる。

少年 可哀相だけど仕方がないのさ、特急は早いからね、鳥も急には止まれないだろうね。

少年 カラスも？

与一 あれは特別さ。あれは知恵が働くからね、一度もないな。

少年 へえ……

与一 嫌になったかい？

少年 え？

与一 機関士だよ。

少年 僕は吐いたり失神したりしないさ。父さんの子ども。それに約束したろ？僕は父さんの機関助手になるんだ。

与一 与一君だろ？

少年 どうして父さんと呼んじゃいけないの？

与一 だって僕らは親友だろ？親友っていうのは対等じゃなきゃなれないんだぞ。

少年 変わってるな、僕の父さんは……。あ、又聴こえる。父さん！与一君！早く早く。

二人地面に耳を押しつける。

与一 D51だ……まさか……。

けたたましい音が聞こえ二人あわてて飛びのく。

少年 見た？

与一 ああ……あのD51に憧れて、僕は機関士になったんだ……しかしどうして……。

少年 (隕石を見て) この星だ……きつとこの心臓さ。

与一 え？

少年 僕らの心臓に共鳴したんだよ。

と少年、笑いながら木の陰に入って戻ってくるが、戻ってきた富士夫は中年になっていて、少年



1997年再演より
左から少年（久保内亜紀）、石原与一（来銀之介）

と同じ格好で隕石を持っている。与一は同じ場所に佇んでいるがめつきり老け込んでいる。

富士夫 あれは夢だったんだろうか……。

与一 え？

富士夫 父さんが昔乗ってたD51さ。僕は子供の頃、どうしてもあれが見たくてさ。父さんの公休日にせがんで連れてって貰ったろ？

与一 そうだったかな……。

富士夫 線路を探してずいぶん歩いたっけ……コケむした枕木ばかりが続いてて、壊れた橋の上で急に途切れたりしてたよね。土手伝いに降りてくと、廃墟の駅があつて、父さん、水の出ない水道の前にしゃがんで、顔を洗う仕草をした。笑ったなあ……ここで毎日こうやってススを流したんだぞって。僕は藪の中をどんどん入ってた。そしたら線路が見つかったんだ。そこは谷になって、時々風が吹き込んで、僕は初めて来た場所なのに、なんともいえない懐かしさを覚えたっけ。ねえ、確かにあったよね、ほんの短い区間だけど、線路があつたんだ。そして一人で見たんだよね、とてつもないものを……。

与一 そんな気がしただけなのさ……。二人で同じ夢を見てただけなんだ……。
富士夫 そうかなあ……。

与一 ウトウトしている。

富士夫 なんだよ父さん、寝ちゃったの？

与一 与一君だろ？

富士夫 もういいだろ？父さんでも。どうして父さんは、父さんて呼ばれるの嫌がったのかなあ。

与一 卑怯な男なんだよ僕は……あてにされなくなかったんだな、きっと。

富士夫 帰ろうか？

与一 いや……

富士夫 寝ててもいいよ。

与一 同じ夢ばかり見る。怖い夢だ。

富士夫 え？

与一 イスがあるんだ。ただイスだけが。

富士夫 それが怖い夢？

与一 主のいないイスが、そこにある。朝も、昼も晩も。つまり僕がいない夢だ。あるのは僕のイスだけ。

富士夫 ……死ぬのが恐いのかい？

与一 若いころはね、恐かったさ。お前達が生まれてから増々恐くなった……。だけどね、お前が機関士に

なった時、いつ死んだっていいなって思った。もういいやってね……。それが最近なんだか又、ひどく

怖い……。どうしてなんだろうねえ……。もう僕は、なんでもないものなあ……。なんだかこのま

まいなくなるのが、恐いんだな……。

富士夫 僕は父さんの機関助手になりたかった。狭い機関室で父さんと二人、真暗闇を駆け抜ける。父さんの

合図で罐に石炭を投げ入れて、ススと油で真黒になりながら日本中を旅したかったんだ。

与一 ……僕は長生きしたなあ……。仲間はずんど退職して四、五年で亡くなってる……。「有害職」だった

からなあ。当時の機関士は、あの黒い煙で肺の中まで真黒だった。ディーゼル機関車は便利で楽ちん

さ。

富士夫 一緒に乗れるかな？

与一 え？

富士夫 この星の心臓、今度は僕らを一緒に乗せてくれないかな、D51に。

与一 ハハハ、お前は変わってるな。大人になってもそんなこと言ってる。

富士夫 父さんはもう運転したくないのかい？

与一 富士夫、父さんは今でも運転してるんだ。

富士夫 え？

与一 毎日、毎日、真夜中にね。

富士夫 ええ？

与一 ハハハ、朝起きるまでってことだよ。機関車が故障してどうやっても動かなかったり、逆に止めようとしても止まらない夢ばかりだ。そしてね、その時の僕はまだ少年なんだよ。僕は深夜になると国鉄職員になって運転席に座る。そしてどんどん若返ってく。まだ罐磨きだった少年の歳で、機関士になっている。昼間主のいないイスの夢を見て、真夜中には運転席に座ってる。怖いのはね、現実の僕が何の役にも立たない老人で、夢の中の僕が、生き生きと力強い、深夜特急の機関士だってことなんだ。夢の時間ばかりが、どんどん鮮烈に僕の生命を縛って行く。夢の少年は、僕のはずなのに、もう、今の僕には手の届かない、まばゆいくらいに毅然として独立した別の機関士に育ったんだ。もうこの僕はどこにもいない……。僕の夢の中でさえね。

富士夫 父さん、その夢の機関士に助手はいないのかい？僕がその夢に入り込めたなら、僕が罐を焚くよ。そしたら、父さんは父さんだもの。僕が毎夜毎夜監視して、その少年に、僕が息子なことを嫌でも思い知らせてやるんだ。与一君！富士夫君！て呼び合いながら、ほんとの親友になれるんだ。

与一 ウトウトする。

富士夫

父さん、そしてね、主のいないイスの前には等身大の鏡を置こうよ。そうすればそのイスをながめる父さんの姿が映ってるはずさ。父さんはいなくなっただんじやなくて、ただそのイスを立てながめているだけなんだってきつと判るはずさ。僕は父さんの助手だもの。主のない機関車は操縦できない助手だもの。父さん……。

与一眠っている。

北斗がどこから現れる。ランドセルをひきずっている。妙に明るい少年である。

北斗

おじちゃん、何してるの？

富士夫

ああ、北斗君か。おじちゃんね、夢を見た。

北斗

立ったまま？

富士夫

ああ、この頃しよつ中さ。

北斗

どんな夢？

富士夫

死んだ父さんの夢だ。

北斗

ああ、機関士だったおじいちゃんのこと？

富士夫

ああ、子供の頃、一度だけ、父さんと旅に出たことがあってね。おじちゃんよつぽ嬉しかったんだな。父さん忙しくてちつとも遊んで貰えなかったから……その時の夢がね、どんどんふくらんでくるんだなあ……。

北斗

そんなに好きだったの？おじいちゃんのこと。

富士夫

憧れてたんだずつとね。父さんみたいになれたかった……あんなとてつもないものを楽々と運転するんだぜ。まるで魔法だ。僕は魔法使いの弟子になれたかったんだ。

北斗
それは？

富士夫
隕石さ。星の心臓だ。

北斗
へえ……。

富士夫
この石を抱いてると、父さんと話ができるんだ。

北斗
死んでるのに？

富士夫
夢の中でね、僕を叱ったり励ましたりしてくれるんだなあ。

北斗
子供みたいだね、おじちゃんは。

富士夫
北斗君も機関士になるんだろ？

北斗
……

富士夫
この前そう言ってたじゃないか。北斗って名前はおじいちゃんがつけたんだぞ。ブルートレインの名前だ。君は「北斗」を運転したいって言ったよね。

北斗
幼稚園の頃だろ？

富士夫
じゃあ、君は何になりたいんだ？

北斗
……判らないよ。僕は何かになれるのかなあ。

富士夫
当たり前だろ。みんな何か仕事について、何かの役割を果たすことになるんだから。

北斗
どんなに悪い子でも？

富士夫
君はいい子だよ。

北斗
おじちゃんは知らないんだよ。僕がいるから、父さんも母さんもお兄ちゃん達もみんな困ってるんだよ。

よ。だからみんな落ち着かないのさ。

富士夫
何言ってるんだ？

北斗
なんだか僕、疲れちゃったよ。僕がもっと良い子だったらなあ……。

富士夫 何かあったのかい？

北斗 なんにもないよ。なんだかおじちゃんといるとホツとするな。なんでだろう。ダラダラしちゃうな僕。こんなんでいいんだろうか。

とダラダラする。

富士夫 いいんだよ子供はダラツとしてりや。

北斗 ハハハハ。

富士夫 ハハハハ。これ、やるよ。

と隕石を差し出す。

北斗 ええ？

富士夫 君にやる。

北斗 だっておじちゃんの宝物だろ？

富士夫 いいんだよ。これを持つてると機関士になれるぞ。おじいちゃんとおじちゃんの心臓が入ってるからな。

北斗、石を受け取る。すると眠っていた与一が目を覚ます。

与一 又ウトウトしちまった……機関助士に怒られるなあ……。

北斗 あ……。

富士夫 おじいちゃんだよ。

北斗 ほんとだ、こんにちわ、おじいちゃん……。

与一 富士夫かい？

北斗 北斗だよ。

与一 ああ北斗か……大きくなったな。僕はどれぐらい眠ってたんだろう。

富士夫 ほんのちよつとき。

与一 夢の機関士に起こされたのかと思ったよ。

富士夫 父さん、北斗も乗るよ。北斗は機関士見習いだ。父さんと僕の深夜特急に今度は三人で乗り込むんだ。

与一 そうか、にぎやかだなあ……。

北斗 ここはどこ？

富士夫 あそこだよ。星を拾った風の谷さ。ホラ、星の心臓がドクドク言ってる。僕らはね、いつだってここにこれるんだ。

と富士夫地面に耳を押しあてる。

富士夫 与一君！来るよ、あの音だ。

与一も同じように耳を押しあてる。

与一 ほんとだ。

富士夫

北斗君！

三人地面に耳を押しあてて、眠るように瞼を閉じていく。遠くの方から列車の音が響き、どんどん近付いてくる。舞台暗くなり列車の音強くなるが、フツと街のノイズに吹き消され、遠くの電車の音に変わっていく。

明るくなると、団地の屋上。わきの小さな階段を登ると物干し台があり、背の高い避雷針が突き出ている。下には発泡スチロールの箱があり、小さな温室のようにテント状にビニールがかぶせられ、植物が植えられている。隅には置き忘れられた三輪車、サッカーボール等がある。近くに駅があるらしく電車の通る音が風に乗って聴こえてくる。ジャージ姿の中年の男が高校生らしい男女を伴って現れる。二人も又ジャージ姿である。

男の名は石原愛人。高校生はその双子の息子と娘、みずほとさくらである。二人は洗濯物のかごを持っていく。ジョギングでもしてきたのか、二人とも頬を紅潮させ、額に汗が光っている。

石原

快晴だ！（と腕時計を見る）八時五十九分五十五秒、三、二、一、かかれ！

みずほとさくら手際良くシート等を広げ、号令をかけながら次々と洗濯物を干して行く。

石原

声が小さい！何度言ったら判るんだ。

二人

……

石原

返事は！

二人 ……はい！一、二、三、四、五、六。一、二、三、四、五、六。
石原 次っ！

二人大物が済んだ後、シャツや下着などの小物をそれぞれのカゴに別れて取りかかる。

石原 用意。

二人 はい。

石原 かかれ。

二人 はい。

石原腕時計を見る。

石原 三分前。

と言いながら、小さなビニールハウスのビニールを開いている。

石原 一分前。

石原持っていたじょうろで植物に水をやる。

石原 (ビニールをかぶせながら) 五秒前、三、二、一、

二人息せき切って石原の前に並ぶ。

石原 報告！

二人 完了。

石原 良し。休憩！

二人階段の陰からシートを運び中央に広げ、みずほは水筒の中の麦茶を注いで並べ始める。さくらはプラスチックの小皿に切り分けたカステラを載せる。

みずほ 完了。

石原 良し。

と、石原シートにあぐらをかいて座る。それを確認してみずほとさくら正座する。

石原 休め！

二人あぐらをかく。

石原 かかれ！

二人麦茶を飲み、カステラを食べ始める。

電車の通る音。

石原 あれ？

二人 ……（と食べるのをやめる）

石原 北斗は？

二人 顔を合わせた。

石原 北斗はどうした？

二人 ……

石原 ジョギングの時はいたか？

みずほ いいえ。

石原 ……寝坊か？

二人 ……

石原 さくら、起こしてきなさい。

さくら ……

石原 呼んできなさい。今日は日曜だって言ってきたなさい。

さくら ……熱が…あの、風邪で熱があるので休んでます。

石原 そうか！いや風邪ぐらいで休んじゃいかんよ。とにかく呼びなさい。

みずほ 下痢です。下痢を伴う風邪なので、走れないし、重労働は控えさせないと。

石原 重労働？洗濯物干すのが重労働か？…動かなくてもいいから、朝の挨拶ぐらいはするべきだ。

さくら
忘れてました。今朝早くに、母さんが救急病院に連れて行きました。
みずほ
そうそう、忘れておりました！

石原
それで母さんもないのか……仕方がない。

と三人黙々とカステラをちぎっては食べ、ちぎっては食べ、皿の粉までなめて、麦茶を飲み干す。
石原腕時計を見る。

石原
休憩終了五秒前、三、二、一。

みずほとさくら階段の陰から黒板を担いで立てかける。

二人
完了。

石原
よし。(とチョークを取り出し) それでは今週一週間の予習を致しましょう。

と黒板に Did you play baseball yesterday ? と書いて二人を見る。

石原
はい。

二人
Did you play baseball yesterday ?

石原
みずほ。

みずほ
(繰り返し返す)

石原
さくら。

さくら (繰り返し)

石原 みずほ、Answer the question.

みずほ Yes, I did.

石原 さくら。

さくら No, I did not.

石原 はい。何々しましたか？と過去のことを尋ねるときは、主語に関係なくDPIを文の始めに置きます。

疑問文では動詞は常に原形を用います。それでは、父さんに尋ねて下さい。あなたは昨日何々しましたか？適当に作文してください。はい、みずほ君。

みずほ ……

石原 何でもいいから、応用しなさい。

さくら 父さん……

石原 じゃ、さくら君から。

さくら それ、中学一年の英語です。

石原 え？

さくら 北斗はいないんです。

石原 ……ハハハ、そうかハハハ、しょうがない奴だなあ……風邪ぐらいで……

と黒板の文字をあわてて消す。

石原 せ、先週のお前達の勉強は？

みずほ 現代社会です。

石原 どこまで行った？

さくら 「生きることの面白さ」哲学の出発点と……

みずほ 「良く生きる」ことと「強く生きる」こと。ソクラテスとニーチェの話までです。

石原 「良く生きる」「強く生きる」……

と黒板に文字を書こうとして、ふと動きを止め、空を仰いでじっとしている。

みずほ 父さん……

石原 夜になったら星を観察しましょう。冬の星座は明るい星が多いからね。本当の空じゃないという東京の空でも大丈夫。良く見えるはずさ。

みずほとさくら顔を見合わせる。

石原 あの辺りに「冬の大三角」シリウス、プロキオン、そしてベテルギウスが見える。そしてその上に双子座が見えるはずだ。お前達の星だな。カストルとポルックス、双子の名だ。ギリシャ神話はもうや

ったね？

二人 はい。

石原 双子の父は大神ゼウス。母親はスパルタ王妃レダ。ね？双子はそろって武勇に秀で、英雄としてギリシャ中にその名が知れ渡っておった。二人はいつも一緒、とても仲良しで、片時も離れずに一緒に暮らしていたんだが、ある時、他愛もないケンカが元で、その傷が致命傷となりカストルは死んでしまった。残されたポルックスは嘆き悲しんで、自分も死のうとするんだが、大神ゼウスの血を引いてい

みずほ

石原

みずほ

石原

さくら

みずほ

みずほ

さくら

みずほ

みずほ

石原

さくら

石原

さくら

石原

るものだから死ぬに死ねない不死身の体。ポルックスは父親に頼み込んだ。「カストルがいなきゃ生きて行けない。自分一人では死んだのも同じ。カストルだつてきつとそうに違いない。どうかカストルの元に行かせてください。」……ね？心が張り裂けんばかりに嘆き悲しむポルックスを見て、ゼウスは可哀想になり、彼の不死を解いてやった。そして二人の仲の良さを誉め称え、一日死の国で過ごしたら、次の日はゼウスの元で暮らせるようにしてやった。そして、二人の姿を星座として天に上げて、双子座と名付け、人々の手本となるようにした訳なんだね。

父さん、質問していいですか？

何だ。

二人とも神の子なのに、どうしてカストルだけ不死身じゃなかったんですか？

え？……

カストルは母親の血が濃かつたんじゃないの？二卵性だから顔も性格も全然違つて、だから逆にう

まが合つたのよ。

同じ双子でも一人は神の子で、もう一人は人の子つてこと？不公平だよそんな。

同じ白人とのハーフだつて、うちのクラスの鈴木君は出っ歯のチビだけど、隣のクラスのジミー君は

長身で毛深くてどっから見ても外人じゃない。

そうか……

神の子はね、自分では死ねないということなんだよ。自分では死を選べない。どんなに苦しくともね。

カストルの死は自己の意志とは関係なく神に選ばれた死だった。ポルックスは永遠に生きる運命を背

負わされていたんだね。

それじゃ、ゼウスはその不死を解いて、自ら生命を絶つ自由を与えたんですね。

そうですね。

さくら あのと二人は、今日はどっちにいるのかしら。

石原 え？

さくら 死の国？生の国？一日置き、今日はどっち？可哀相に、毎日毎日旅を続けているなんて、生から死、

死から生への旅を。

みずほ 嫌だなあ、一日置きに死ぬなんて。

石原 お話さ。ただのお話。作り事だよ。……大三角の西の頂点ベテルギウスはオリオンという名の狩人の

右肩に位置する星ですね。左肩、腰と膝その星々を線でつなぐと砂時計のような形に見える。それがオリオン座だが……

といつの間にか、石原の妻、哲子がじょうろを持って登場している。

哲子 北斗七星は？北斗の星はどこに見えるんです？

とビニールをはずして水をやる。

石原 さつきやったよ。あんまりやりすぎると枯らしちゃうだろ？

哲子 私が育てなきゃ。北斗の植物園なもの。

と哲子丁寧にビニールをかざる。

と空を仰いで。

哲子 星なんてないじゃない。

石原 見えないだけさ。昼間なもの。

哲子 見えないわ。見えないじゃないの、北斗七星。

石原 ずっと北の方、ここからじゃシッポの方は、無理だな。ひしゃくの縁の手前の二つぐらいは見えるかなあ……

哲子 あなたは何を見てるんです？

石原 え？

哲子 青空を指差して、ない星を数えて、この子達に何を教えるの？北斗に何を教えたの？私には、あなたが見ているものが見えません。北斗には見えていたの？あなたが指差す物が……。

石原 何言ってる？何言ってるんだ？お前は。哲子、しっかりしなさい。

哲子 しっかりして下さいあなた。いつかの記憶をあてにして昼間に星を探すなんて。服の上からみぞおちのホクロを探すみたいじゃありませんか。私の服を脱がせた時、もしホクロが消えていたらどうします？こいつは哲子じゃない！きっとあなたは言うでしょう。そんな人なんですあなたって人は。

と隅に転がっていたサッカーボールの泥をエプロンでぬぐっている。

石原 星々の位置はね、私のいつかの記憶なんかじゃない。決まってるんだよ、大昔から、ギリシヤの神々の時代からね。

哲子 決まってることなんてあるんですか？決まってるの？あたし達。誰が決めたの？あたし達。

石原 ……忘れていたよ。お前のみぞおちにひしゃく形に並んだホクロ。

みずほ 母さん、横になった方がいいよ、少し眠った方がいい。

哲子
眠ってるのよ。あたし。夜中に眠れなくてねえ、朝から寝るのよ。あたしはもう夢の中でしか起きる振りができないの。夕方まで起こさないでね。

とその辺を歩き回って洗濯物を取り入れる。

石原
何やってんだ哲子！さくら、やめさせなさい。

さくら物干し台にさがり哲子の取り込んだ洗濯物をまた次々に干していく。それを又取り込む哲子。

石原
哲子！

石原、哲子をはがいじめにするが抵抗する哲子とついに取っ組み合いになる。泣きわめく石原と哲子。

さくら下に降りみずほと並んでシートの上に正座する。

と中年の男、石原の同僚で哲子の兄の鈴木靖夫が現れる。

鈴木
ここにいたのか、みんな。

さくら
おじさん、麦茶飲みます？

と水筒を突き出す。

鈴木、息を切らした石原と哲子をしばらく見ている。

鈴木

石原君、いつから出てくるんだ。やめるのかもう……

さくら

父さん、行っていないんですか？

鈴木

なんだ、知らなかったのか？

みずほ

ええ。毎日出かけてたから、同じ時間に電車に乗って。そこから見えるんですよ、改札で手を振る父さんが。僕ら毎日、ここで見送るんです。昔から三人並んで、ここで「いつてらっしやい！」って。すると母さんがあがってきて、「御飯ですよ」って声をかける。僕とさくらがテーブルにつく頃、北

斗は一人ここに残って、植物園に水をやる。僕らがあの改札に立って振り向くと、屋上の手すりから身を乗り出して体を大きく斜めに傾けるようにして両手を上げた北斗の体が見える。ムンクの叫びみたいに開いた口だけが見える。僕らは恥ずかしいから父さんみたいに手をあげたり、声をかけたりしないけど、そんな北斗を確認してからホームに駆けてくんだ。あとは知らない。北斗がここで何をしていたのか……朝御飯までの一時間、北斗はここで何をしてたんだろう……

鈴木

貰おうかな……

さくら

え？

鈴木

麦茶。

さくら水筒のフタに麦茶を注いで鈴木に差し出す。

そして小皿に取り分けたカステラを鈴木の前に置く。

鈴木

ん？

さくら 北斗の分だけど。

鈴木食べる。

鈴木 甘いなあ……

さくら突然大声で泣き出す。

石原と哲子、争うのをやめて物干し台にしやがみ込む。

鈴木 いい天気だな。

石原降りてくる。

石原 鈴木先生、いらしてたんですか。

鈴木 ああ。やめるのかい？

石原 え？

鈴木 学校……

石原 どうして？

鈴木 出て来ないからさ。

石原 え？

鈴木 六年生の担任だものねえ。苦しいのも判るけど、先があるんだからさ。毎日自習じゃ可哀相だよ子供

達も。

石原 今日は何曜日ですよ。何言ってるんです？

鈴木 だから来てみたんだろ？日曜だから。哲子、哲子も話そう、下行って。

哲子 起きてからにして。今眠ってるから。夕方来て下さい。

鈴木 何言ってるんだ哲子。

さくら 寝てないんです母さん、あの日からずっと……おじさん、あたし達、あれからちっとも話をしないんです。朝が来て、夜が来て、又朝になって、なんだかそれだけなんです。あたし達、人間じゃないみたい。

鈴木 お前達はどんなんだ？

さくら え？

鈴木 学校行ってるのか？

さくら ……。振り向くのが恐いんです。あそこの改札で立ち止まるのが。

鈴木 石原君、しっかりしなきゃダメじゃないか、二人とも来年受験だろ？

石原 勉強してますよ、毎日毎日。私がきちんと教えてる。教員の子供が勉強できなくちゃ、教室で恥かくものねえ。

さくら 父さんのための勉強なんてもう嫌です。付き合いきれないわ。もつと考えなきゃいけない事が沢山あるのよ。でも考えられない。あたし達、船長のいない船に乗ってるみたい。それは帆もない船だから、

行き先も判らないばかりか、出発したのかも判らない。ただ中途のままに浮かんだけ。日がのぼって沈むのを、息を殺して見ているだけ。あたし達、もう誰が誰なのかも良く判らないんだわ。父さ

ん、母さん、みずほ、北斗、あたし。遠い日に読んだお話の登場人物みたい。

鈴木 話をしよう、みんな、下行って。



1996年の初演より

左からさくら(杉嶋美智子)、哲子(遊上良子)、鈴木靖夫(遠藤靖)、
みずほ(樋口浩二)、石原愛人(土屋良太)

さくら
ないのよ、話なんかもうないの。
哲子
水をやらなきや。

とビニールをめくる。

石原
さつきやったよ。

と石原、哲子のじょうろを取り上げる。

石原
熱下がったか？

哲子
え？

石原
北斗だよ！病院行ってきたんだろ？

哲子
……

ビニールの中の植物群を見つめている。

鈴木
何言ってるんだ？石原君は……

哲子
お兄ちゃん、静かにしてよ。

「あろう」と声がする。

一同振り向くと引越し屋の制服を着た男が立っている。

鈴木

なにかね。

男

石原さんですか？

鈴木

ああ、こっちだ。

男

引越しの見積もりにきました。

鈴木

ええ？

男

今日でしたよね、あの、先月お電話いただいて……隣の吉田さんに、屋上だろって聞いたもんで。

一同

……

男

今度の祭日ですよね引越し……あれえ？

鈴木

悪いけど、また来てくれる？今、とり込んでんだよ。

男

でも、先月……いいですけど……、でも次だと来週になりますよ、今立て込んでるから。

鈴木

買ったんだな。一戸建て。千葉だっけ？

石原

下がったからね。ローンを組んだら、家賃と同じぐらいだったし。忘れてたよ……

男

今度は庭に植えられますね。

と男、哲子と並んで植物園をのぞき込む。電車の音がする。

その音に重なり、列車の音が遠くから近くへガタゴトと響いて通り過ぎる。

シーンと静まり返った闇の中。声がする。

暗闇から声。

声1

ケロケロ。

間

声 2
ケロケロ。

声 1・2
ケロケロ。

声 3
ケロケロ。

声 1・2・3
ケロケロ。

一同
ケロケロ。

明るくなるとカエルが十匹ほど鳴いている。

カエル 1
ケロ

カエル 2
ケロケロ

カエル 3
ゲロギユロ

カエル 1・2・3
ゲロギユロケロケロ

三匹カエルの言葉で会話を続けている。他のカエルは周りの花や草ムラで、それぞれ鳴きながらカエルなりの生活を営んでいる。

三匹のカエルの口論がエスカレートしてくると徐々にリズムを帯だし歌に変わっていく。

歌

♪ケロケロケロケロゲロギユロケロケ

ケロケロケロケロゲロギユロケロケ

ゲロゲロガッコガッコ
ゲロゲロガッコガッコ
キュルキュルキュル
キュルキュルキュル
ケロケロケロケロケロキユキユキユ
ケロケロケロケロケロキユキユキユ
ゲロゲロギエロギエロケロカエロ
ゲロゲロギエロギエロケロカエロ
ガッコカエロガッコカエロ
ガッコカエロガッコカエロ
ケロツケ ケロツケ
キュロツケ キュロツケ
ケロケロケロケロケロキユツキユツ ケロケ
ケロケロケロケロケロキユツキユツ ケロケ

どこから白衣の男、さきほどの石原が登場してくる。

石原

それでは皆様に御理解いただけますよう通訳いたします。

カエル達はまだ歌っている。

石原

私達はこの森に住んでいます。森……そうですね、みなさんにとっては森なんです、この者達は、家と歌っていますね、ええ、もとい！私達はこの家に住んでいます。小さいのか大きいのかは判らないけれど私達にとってはちょうど良い大きさの家なのではないかと思っております。私達は親もなく、配偶者もない、従って子供もまるでいませんが、初めからそうなので、なにもとりたてて不思議がる者もここにはおりません。だから、いつからここにいるのか私達には判らない。気が付くと、空があり、土があり、水があり、私達の家があつた。そしていつの間にか歌っていた。それでいいじゃないか。何も考える事はないじゃないか。私達がどこから来て、どこへ行くかなんて、私達には興味がない。それは考えたい人が考えればいいんだ。私達は歌いながら時を過ごし、歌いながらどこかへ行く。それがどこなのか、まだ体験していないので、私達には判りませんよ。とこう歌っているんですね。

とカエルと一緒に続きを歌う。

カエル1

もっと詩的に通訳してよ、語呂が悪すぎて歌になってないじゃない。

石原

無理ですよ、詩人じゃないんだから。

カエル1

いいわよ、私が歌うから。

と続きを日本語で歌う。

カエル1

♪いつからかしら歌ってた

あの空の星と同じように



1997年の再演より
カエルの登場。左から4番目、カエル1（渡辺えり子）

まるで変わらない きのう 今日 明日
誰のために 何のために
歌う歌なのか

何かを待つでもなく
待たれる訳でもなく
誰かが聴くでもなく
聴かせる訳でもなく
いのちをふるわせる
どこから来てどこに行くのか
いつからかしら歌ってた
けれどまたたく星の中
星の破片が燃えながら
一つ流れて落ちたよう
考えが空から 誰かの瞳に宿る
どこから来てどこに行くの
考えが空から
それは誰の夢
星と同じ歌 歌ってた

カエル 1 石原

あんた日本語できたんですか。
できないわよ。人じゃないんだから。

石原

だって今歌ったし、喋ってる。

カエル 1

やあねえ喋ってないわよあたし。聴こえるような気がするだけでしょ？心のアンテナで通信し合ってるんだから。

石原

えええ？

とバカにする。

カエル 1

世の中にや、外人同士が、それぞれの国の言葉で会話し合っても他人と通じるドラマだってあるのよ。約束事、約束事。じゃなきや、「キャッツ」も「ブンナ」も上演できないじゃない。なんでわざわざこんな格好で出てこなきやなんないのか判んなくなっちゃうでしょ。ねえ。

ケロケロ

一同

じゃ、あんた達、なんでわざわざそんなカエルなんかの格好してんです？

カエル 1

カエル？

石原

カエルでしょ？

カエル 1

あんたカエル？

カエル 2

さあ……

カエル 1

あんたは？

カエル 3

さあ……

石原

カエルですよ、あんたら！

カエル 2

それ誰が決めたの？

石原

決めなくてもそうなんですよ。

カエル2
カエルつて何！
石原
名前ですよ、あんたらの。

一同首をひねる。

石原
有形、無形の事物をほかの事物と区別して言い表す呼び方のことを名前と言っています。
カエル2
あんたは？

石原
私は石原愛人です。

カエル2
アイト？

石原
愛する人と書くんですよ。ちよつと照れるけど。

カエル3
まあ……

カエル1
それ誰がつけたの？

石原
父親の高校時代の恩師、中山先生つて倫理学の先生。アガペーからとった訳ね。ほら、神の愛からね。
カエル2
アカンペーねえ。

カエル3
神の愛は、人をおちよくる愛なのね。

石原
自分を犠牲にして人間に注ぐ愛のことなの！

カエル1
まあ、まあ、まあ、石原さん、あなたの名前をつけたのは人なんですか？
石原
勿論です。

カエル1
それじゃあなたは何なんです？
石原
人ですけど。

カエル1
私達は？

石原
カエルです。
カエル1
んんんん……

と三人固まって話し合っている。

カエル1
判った！人間てさ、名前をつけなきゃ区別できないんだわ。自分と他人、それよりもっと遠くにいる他人、動くもの動かないもの、それらの区別がねえ……
カエル3
バカじゃないの？
カエル2
うん。気の毒だからさ、ここはひとつ大人になって、カエルってことにしとかないか？
カエル1
ええ？
カエル2
レベルを落として付き合ってやらないと、落ちこぼれは何しでかすか判らんからな。
カエル3
疲れるわあ……
カエル1
石原さん、いいわ、あたし達、カエルになってあげます。これで気が済んだわね、じゃ！

と一同帰りかける。

石原
待ってください。カエルさん達！

どんどん帰る。

石原
どこに行くんです？

カエル1 カエルのよ、カエルなんだから。

石原 どこに帰るんです？

カエル1 来たところに。

石原 どこから来たんです？

一同 さあ……

と退場しかかる。

石原 待って下さいよ。まだ出会ったばかりなのに。

カエル1 じゃああたし達カエラ・ナイなのね！

石原 カエルです。

又退場しかける。

石原 待って下さい！

カエル1 どっちなのよハッキリしてよ！

カエル2 やっぱりバカとは付き合いきれないな。

カエル3 ほんとに帰っちゃおうか。

カエル2 まてよ、俺達バカにされてんじやないのか？

カエル3 え？バカにバカにされてんの？だったら私達バカよりバカってことになるわよ。

カエル 1

石原さん！やっぱり私達にとって私達はカエルじゃないと思うわ。私達は私達でしょ、人が人のためにつけた名前なんて、私達の存在とは全く別のところにあるものであって、あたし達には何の役にも立たないものなんです。

カエル 3

そうよ、カエルなんて呼ばれる筋合いないわよ！

一同

ケロケロ

カエル 3

それにこいつ人でしょう？なんで人なのに石原なんて別の名があるのよ。

一同

ケロケロ

カエル 3

私達だけみんなカエルでこいつだけ特別なのよ。

カエル 2

え？人ってみんな石原って名じゃないのかよ。

カエル 3

だってさつき中山先生なんて言ってたじゃない。

カエル 2

お前、見下してるな！生き物に勝手に名前つけてオモチャにして遊んでるな！

石原

研究してるだけです。それに名前つけたの私じゃなくて、昔々のその生き物を発見した人達なんです。しかし、発見より以前に、名前などは別に生き物は棲息していたに違いはないんだが……しかし、誰なんだろう。人類最初に誰かの名前を呼んだ人……？どれ！

とカエルをつかまえようとする。

何が起きたのか理解できず立ちつくすカエル達。石原、カエル3の後ろからガシツとつかまえる。

カエル 3

何すんの？

石原

研究するのよ。

カエル 2

研究するのになんでそんなことするんだよ。

石原　つかまえてるんだよ。

カエル2　なんで？

石原　研究するのに必要でしょう？

カエル2　え？

石原　カエルの研究するためには、カエルが必要だって言ってるの！だからツカマエルの。

カエル1　私達ツカマエルなの？

石原　私がツカマエルの。

カエル1　ああ、あんたがツカマエルの。

石原　いや、カエルをツカマエルの。

カエル1　あんたはカエル？

石原　いや帰らないの、ツカマエルの。

カエル1　私達は？

石原　カエル。

一同又帰ろうとする。

石原　待てよ、ガシッ。

と又つかまえる。

カエル2

何してんの？

石原 つかまえてんだって！

カエル2 つかまえて何するの？

石原 解剖。

一同 カイボウ？

石原 すぐ済むから、うん、アッ！という間。

カエル3 ホント？

石原 ホント、ホント。

カエル3 痛くないの？

石原 うん、痛くない。クロロホルム使うから、眠ってる間に、チヨイチヨイ。

カエル3 それ何かの役に立つこと？

石原 立つ、立つ。

カエル3 じゃあ、ちよつと行ってこようかな。

カエル2 バカ、人の役に立つだけだろ？

石原 そ。

カエル2 何で俺らがお前らの犠牲にならなきゃなんない訳よ！

さつき歌ってたね。君らが将来どこへ行くのかって……体験できちゃうよ。なんだ、こんなところに
来るんだってすぐ判るのよねえ。

カエル3 ほんと？

石原 ホントホント。

カエル1 すぐ戻ってこれる？

石原 え？

カエル1 将来行くべきところに行ってみた後、すぐ帰ってこられるの？

石原 んんんん……

カエル1 帰れなきゃカエルじゃないよ。

石原 いいから行こ行こ、待ってんだよ、子供達が、君らつかまえないと授業になんないんだよ。ガシツ！

とその辺のカエルを二、三匹押さえつける。

声 待ちなさい！

と女の声。

帰りかけていたカエル達どどん戻ってくる。

声 違う、違う、逃げなさい、あなた達は。

一同 ケロケロ。

と又帰る。

声 待ちなさい！

一同 ケロケロ。

と戻ってくる。

声
一 違う、違う、逃げなさい、あなた達は。
ケロケロ。

と又帰る。

声
一 待ちなさい！
ケロケロ。

と戻ってくる。

声
あなたですよ。

石原振り向いて自分をさす。

声
カエル達を放しなさい！

と声の主振り向くとその顔はさくくぼぼある。

石原
あんた誰？

野バラ 1
カエル達
この国の女王です。
あ、花の女王様。

野バラ 1 カエル達、だまされてはいけません。この人はあなた達を殺そうとしてるんですよ。
カエル 1 ええ？

野バラ 1 死んでしまったら、もう二度と帰って来れません。カエルでもカエラナイでもない、カ・エ・レ・ナ・
イになるんです。
カエル 3 死ぬって？

野バラ 1 死ん……（とヒステリーを起こしそうになるのをこらえている）

石原 1 いいんだよ、こいつら死ぬことだって生きることだってよく判ってない連中なんだよ。それが人間様の研究のお役に立ってるってのは本望だろ！

野バラ 1 ホラ、見なさい。本性現わした。何が神の愛よ。都合のいい！こんな世界の天敵をこの世に誕生させたのなら、それは神ではなく悪魔に違いない！

石原 1 昔々は、人間様のために、進んで火の中に身を投じたウサギさんだっているんだぞ！弱いものは強いものに守られてんだから、そのための犠牲はやむをえんよ。

野バラ 1 あんたらと安保条約結んだ覚えはないわよ。ここは独立国家なんだから！鎖国します。今、鎖国しましたから、よそ者は出てってください！

石原 1 そんなこと言わないで、共存共生していきましようよ。
カエル 2 できません！自分らの繁殖のためには手段を選ばず、加減もできない人達なんかとは！

野バラ 1 女王様、何怒ってんの？こいつただのバカだよ。俺達ちよつとからかってやっただけなんだから。何言ってるの？こいつらのお陰でおたまじゃくしも育たないのよ。

カエル 2 おたまじゃくしって？
野バラ 1 あなた達の子供のことです。

カエル3 子供って？
野バラ1 んんん……私の下男に頼みましょう。きっと、あなた達に知恵をさずけてくれましょう。

と隣をつつく。隣の花が仕方なく振り向いて口をきく。みずほである。

野バラ2 面倒臭いなあ……

野バラ1 何言ってるの？死んじやうのよ、この森の仲間が。森の生き物が死んじやうってことは、私達だって危ないってことでしょう？生き物を作り出したのは私達植物の遠い遠い祖先達でしょ！

野バラ2 結局、そうやってみんな自分のことしか考えてない訳でしょ。今更人間だけ責めたってもう遅いよ。あいつらだって、本能でやってんだから。こっちは弱くて小さくて、脳みそある訳じゃないんだしね、もう死ぬしかないよ。これも自然の成り行きさ。

野バラ1 ペシミスト！それでもあたしの下男なの？

野バラ2 下男、下男って言うなよ、もう二人つきやいないんだ。交替で上下関係決めてるだけだろ！

石原 あんた達誰なんだ？

野バラ1 花よ、野バラ、見りや判るでしょ？

石原 さくらじゃなくて？

野バラ1 バラです。あっちでフラフラしてるのが野の白ユリ。

と、奥で白ユリの格好の哲子がフラフラしている。

石原 ほほう……こいつは？

と、その辺に咲いていた花を引っこぬこうとする。

花 石原

「やめて！私は名もない花だから。名もない花か、まだ発見されていない植物なら、石原と名づけてめでてもいいな。」

と又引っこぬこうとする。

花

「殺さないで、親も兄弟もいともハトコも大伯父もみんなみんな殺されて、年老いた私はもう朽ち果てるのみ……ああ、誰にも気付かれず、私がいたということさえ誰の記憶にもとどめられず、私達の種は死に絶えていくのです。」

石原

「あ、そう……」

白ユリがフラフラやってきて石原とぶつかる。

石原

「なんだよ君。」

野バラ 1

「シッ！静かに。」

石原

「え？」

一同

「シッ！」

野バラ 1

「起こしたら大変なことになる。」

石原

「大変？」

カエル 2

「静かに！（と大声で）」

カエル1 シツ！（とカエル2を制する）

カエル2 （小声で）谷間の白ユリは誰にも気付かれちゃいけないんだよ。

花 それあたしでしょ？

野バラ2 あんたここじゃ有名だろ？自己主張激しいから。謙虚な雑草なんて聞いたことないもの。

花 雑草！あたしが名もない花なのは、とりたてて名付ける必要もないくらいのあるふれた花だからっ

ていうの！

野バラ2 そうだよ、あんたその辺のただの花。世界が減んで生き残るのは、カラスとゴキブリとあんただけだよ。

静かにしなさい！内輪もめしてどうすんの？戦争中よ！

戦争？

そうでしょ！私達こいつらと戦ってるのよ！

武器を持たない負けいくさか……

何言ってるの？あなた達。

花 人間が一方的にしかけてきた侵略戦争よ。幾世期にも渡って繰り返されてきた果てのないいくさ。そ

れはこの世の終わりまで続くんだわ。ああ、私達一体どこに行くのでしょうか。

何言ってるのか全然わからない。

考えなさい！

考える？

カエル1 判った！私たちカンガエルなのね。

カエル3 そうか。

一同

ケロケロ。

白ユリ

みんなみんな私のせい……もう日はのぼらない……何も見えない、聴こえない、光も音もない世界……
…暗い、暗いわあ……

石原

あの……

野バラ 1

ダメよ話かけちゃ。

石原

え？

野バラ 1

この人夢遊病なの。この人は今ここにいない。暗い谷間に一人で咲く白ユリよ。

白ユリ

暗い、暗いわあ……

石原

ほんと暗いなあ……

野バラ 2

こいつがいる限り、希望なんて生まれないうこの森じゃ。

白ユリ

暗いわあ……

石原

暗いのはあんたでしょう？

白ユリ

だあれ？誰かいるの？

一同

あ……

と男をにらむ。

白ユリ

風の音かしら。

一同

シーン。

白ユリ

気のせいね。

野バラ 1

早く出てってよ！ここは平和な風の谷なんだから。

石原 出て行きますよ、用事が済んだらね。ガシッ！

と又カエルをつかまえる。

カエル達 助けてケロ！

と駅員現れる。駅員は愛人の兄富士夫である。

駅員 どうしました？いい天気ですよ。

カエル達 助けてケロケロ！

駅員 いいですよ、助けましょう！

石原 お兄ちゃん、お兄ちゃんでしょう？

駅員 はあ？私は駅員ですけど、あんたは？

石原 愛人ですよ。

駅員 はあ？

野バラ1 人間よ、こいつ。

駅員 そんなはずないよ、人間がこんなに小さいはずないだろう。

一同 ええ？

駅員 カエルがこれで、花がこれよ。ホントの人間なら足の指ぐらいでこのくらいよ。

一同 あああ！

カエル2 さすが駅員さんだ。僕ら危うくだまされるとこだったよ。お前ほんとは誰なんだ！

石原 人間ですよ。
駅員 人間がカエルと同じ身長な訳ないだろう！

と一番背の高いカエルと並ばせる。

一同 そうだ！そうだ！

石原 あんただって人間だろ！

駅員 失敬な！私は小人の駅員です！

石原 小人？

駅員 それ、民族学の先生達にはコロボックルとも呼ばれてる。私小人の妖精です。

石原 駅員でしょ？

駅員 小人のね。

石原 駅はどこです？

駅員 ここですよ。

石原 え？

駅員 私はこの駅の駅員です。

石原 辺りをうかがう。

石原 ここは森でしょう？

駅員 私は妖精だよ。森も駅も同じさ。切符を見せなさい。

石原 切符？
駅員 お前無賃乗車する気か？
石原 そんな事、私はね、国鉄職員の息子ですよ、キセルだつてしたことないよ！
駅員 じゃあ、出しなさい！この駅には切符がなきゃ入れないんだ。
石原 ええ？

一同 切符を出す。

石原 あああ！
駅員 お前改札通らなかつたら？どっから入った？ええ！
石原 知りませんよ。今日は午後から理科の実験なんだよ、だから昼休みに、ちよいと学校の裏山へカエル取りに出掛けただけだよ。
駅員 そんなことはどうでもいい。ここで切符を持たない者は一番重い罰を受けることになる。(と残忍な顔になる)
石原 まさかあ！
駅員 かあと言つたな！
石原 なんですかあ！
駅員 又かあと言つたな！
一同 カラスだ！
駅員 どうとう化けの皮がはがれたな。
石原 え？

駅員
改札飛び越えて空から来やがったな！駅長！駅長！

駅長の格好をした与一、イモ虫をひきずって登場する。

駅長
どうしたコロボツクル。

駅員
又カラスの奴が無賃乗車を。

石原
父さん！

駅長
カラスの息子を持った覚えはないよ。

石原
どうなってるんだ……

駅員
どうしましょう？

駅長
うん。この前の時は罰を考えてるうちに逃げられたんだったな。

駅員
はあ、なんせ、他国の奴がここに現れるのは稀でして、ましてや切符を持たないものはここに入れるはずもなく、今まで罰を下したことがないからなのです。

駅長
カラスだけだな凶々しいの。

駅員
魔法が使えるからですよ。色んなものに化けやがる。

駅長
私の息子に化けるなんて度胸があるのかアホなのか、一発でバレるのに。

駅員
しかし駅長、この国で一番重い罰って一体なんなんです？

駅長
それが判りや、この前だって失敗せんよ。

駅員
一番体重の重い奴を乗っけるとか？

野バラ2
カエルの体重なんてたかが知れてるよ。

野バラ1
死刑でしょ？一番重いのは。

カエル3 死刑？
野バラ1 んんんん……殺すのよ、死に至らしめるのよ。

とやつのことで落ち着きを取り戻す。

カエル2 解剖か。

石原 か、か、かあ……

カエル3 私達が将来行き着くところだって言ってたわね。それが一番重い罰？

カエル1 だって私達、青大将に乗るのよね。いつか時が熟した時に、天から青大将が降りてくる。その大きな

へビは、口から、赤い舌の代わりに白い煙を吐き出して、私達を次々に飲み込んで行くんでしょ？
飲み込まれた私達はそのへビのおなかのヒダの柔らかな座席に座りながら、遠い星々の間を旅して行くのよね。だから私達、ここでこうして待っているんです。その時が来るのを。

カエル3 それは罰ではなくて定めなのだと、この国では言われているのに……

駅長 そうさ、そのために、君らは切符を手にしたんだよ。だから私は駅長で、こいつが

駅員 駅員です。

駅長 切符のない者は青大将には乗せられんよ。

野バラ1 だから死刑にするのよ。解剖するの！両手両足をピンで留めて、生きたまま臓物ひきずり出すのよ。

一同 あいた口がふさがらない。

石原 い、いやだなあ……

とうっかりイモ虫に座り込む。

イモ虫
フニャ〜。

石原 ウワツ！（と飛びのく）なんだイモ虫か、自分の臍物かと思って肝が冷えたぜ。父さん、助けてよ。仕方がなかったんだよ。理科の実験なんだもの。ホントは俺だつて嫌なんだよ解剖なんて、でも教員なんだもの、教えなきや仕事にならないんだよ。

……

石原 もうしません、しませんから助けてくださいよ。くそ、こんなことなら、父さんの言う事きいて国鉄入るんだつた。乗り物酔いがひどいし、制帽も似合わないし、自信なかったんだよ。父さん、お兄ちゃん！

駅員 何言ってるの？こいつ。

駅長 息子の振りすりや助けてもらえろと思ってるんだよ。

駅員 卑怯な奴だな。

野バラ2 カラスだものねえ。

一同 ケロケロ

白ユリイモ虫の前に座ってじっとしている。

駅員 何してるの？

白ユリ 待ってるんです、蝶になるのを。

石原 話しかけてる。

駅員
白ユリ

いいんだよ、俺は妖精なんだから。

暗い谷には一匹の蝶も飛ばないものだから、花粉が風に消えていく。この子が蝶になったら、私は一人ではなくなるの。この子を連れて帰るんです、誰にも気付かれぬ私の谷へ。この子が花粉を生かしてくれる。

花
そんなのずるいわよ。

駅員

待て待て、こいつは今、ここにいないんだから。イモ虫の夢を見ているだけなんだ。ただの独り言さ。

イモ虫ひっくり返ると顔が見える。北斗であった。

北斗

僕はどうしてこんな事してるのかなあ……

石原

北斗、北斗かい？

北斗

いいえ、僕はイモ虫です、ゴロゴロ。

石原

何言ってるんだよ。

と北斗を起こして立たせてやる。北斗、石原に隅に行くよう目配せする。

石原

え？

石原、北斗を連れて隅に行く。一同は何やら相談している。

北斗

(小声で) 父さん、この国には「家族」という言葉がない、つまり家族のいる住人はいないんだ。こ

石原　　ここに在る間は、僕をそんな名で呼んじやいけないよ。
でも北斗なんだろう？

北斗　　名前なんかどうでもいいだろ？父さんはなんでまたカラスなんかになっちゃったのさ。

石原　　知らんよ気が付いたらカアアア言ってたんだよ。

北斗　　僕も気が付いたらゴロゴロしてたんだよなあ。

石原　　でも良かったよ。母さんにも知らせなきゃあ。

北斗　　ええ？

石原　　お前がね、お前が死んだ夢を見たのさ。……もうこりこりだあんな夢。なんで見たのかな、考えたら

お前が死ぬわけなんてないものねえ。これからなんだから。これから色んな事がある、そして色んな話をするのさ。ああ……嬉しいなあ、父さん、照れちゃってねえ……固くなっちゃって……思ったことと逆のことしちゃってたんだなあ……これから気を付けるから、北斗、父さんに何でも言ってくれ、な？男同士だろ？何が欲しい？買ってやるぞ何でも……
何もいらないよ。欲しいものなんかないんだ。

北斗　　遠慮するなよ。

石原　　……僕は、何が欲しいのかなあ……

と蝶が一匹舞い降りて、相談し合っている一同の周りを飛んでいる。鈴木靖夫に似ている。

蝶　　ヒラヒラヒラヒラ。

駅員　　うるさいなあ、今こっちは真剣なんだよ。

蝶　　ヒラヒラヒラヒラ。

駅員 蝶 あれえ？君誰？
蝶 蝶だよ！さつき羽化したんだよ！
駅員 あれえ？

と北斗と見比べる。

駅員 蝶 さつき駅長が引っぱって来たよねえ……蝶は広場で変態させるのが慣わしなんだがなあ……
蝶 俺がサナギになってるうちに駅長が間違えて別なの連れてっちゃったんだよ。
駅員 駅長！
駅長 おかしいな、私の布団で大事に育てたはずなんだがねえ……
蝶 大体俺は毛虫だったんだから、こんなイモ虫と見間違うなんて失礼じゃないか。見せたかったよみんなに、俺の完全変態。さて、どの蜜を吸うかなあ……

と花々を見渡す。

花 私いいですから後でも……
蝶 なんだせつかく変態したのに。
駅員 あんたそのものが変態みたいだな。

北斗顔が真赤になっている。

石原 どうした北斗？
駅員 あ、脱皮するぞ、こつちもサナギになるな。

一同 北斗を取り囲む。

駅員 あ、押さないで押さないで、大きなものは小さいものの後ろに並びなさい。静かにして！だめだよせんべいなんか食べちゃ！

北斗 唸っている。

一同 拍手する。

くそう……

カエル 蝶
落ち込むなって、客のいない一人芝居もあるさ。

花
（そうよ、名もない花だと思えばね。

駅員 シッ！始まるぞ。

北斗 脱皮を始める。

一同 おお！

と拍手する。が、古い皮を脱いで出て来たのは同じイモ虫、色だけが青く変化している。

一同落胆の声をあげる。

蝶

なんだよ、こいつ、変態しないぞ！仲間じゃないぞこいつ。

駅員

おかしいな。駅長！イモ虫が又イモ虫になってしまいました。

駅長

君は……その……将来なんになるのかね？

北斗

判りません。僕は何かになれるんでしょうか？

駅長

んんん、しばらく様子を見よう。

駅員

判りました。解散、解散、みんなその辺で遊んでなさい。

一同

はあい！

と一同散らばる。

石原

北斗、帰ろう、今のうちに。な、みんなに気づかれないうちに、家に帰るんだ。

北斗

父さん、ここは居心地がいいんだよ。あてにしないし、あてにされない。なんかいいかげんで、中途半端で、僕はここがいいなあ……何もなくていいんだ。ただいるだけでさ。何にも考えなくていいなんて、すごいよなあ……。

石原

何言ってるんだ北斗。何もしないなんて人間じゃないぞ。あてにされない人生なんて寂しいじゃないか。見ろ、新宿西口の路上生活者を、結局追い出されちゃったじゃないか。あてにされない人間はあやうってみんな排斥されて捨てられるんだ。帰ろう、帰って勉強しよう、父さんが見てやるから。

北斗

僕は永遠のイモ虫になっちゃったのかなあ、変態も羽化もしないイモ虫にさあ。

石原

どうしたんだ北斗！までよ、こら、新手の新興宗教じゃないのか？みんなみんな純情そうな顔しやが

駅員

って、誰も責任ないって顔してやがる。くそう……はめられたんだ、こいつを帰さない気だな！おい！
教祖を出せ教祖を！絶対息子を取りもどすからな！
そうだ、こいつ解剖するんじゃないか？

カエル達

ケロケロ

駅員

しかしこの駅に、メスや虫ピンあったかなあ……駅長！

駅長

んん、しばらく様子を見てみよう。

石原

お前が教祖か！

駅長

私は駅長です。

石原

北斗を帰して下さい。

駅員

なんだよ北斗って。

石原

こいつです、息子なんだよ。

駅員

これはイモ虫だよ。それにここには親も息子も兄弟もないはずだよ。お前、カラス君の息子なのか

い？

北斗

いいえ。

駅員

ここから帰りたいのかい？

北斗

いいえ。

駅員

ホラ見なさい。あんた一人で帰んなさい、見逃してやるよ無賃乗車。

石原

北斗を残して帰れるもんか！

駅員

仕方がない。

とカエル達に合図を送る。



1996年の初演より
イモ虫（大谷桃子）がまたイモ虫になる。

カエル達大きな十字架を運んでくる。

駅員
お願いしますっ！

カエル達抵抗する石原を十字架に縛りつけ手足を大きな虫ピンで留める。

石原
痛いよっ！

白ユリ
あたしのせい、みんなみんなあたしのせいなんですう。

と暗く泣きながら、手足の虫ピンを石でどんどんたたいて留めている。白ユリはいつの間にか哲子の服装に変わっている。

一同
ケロケロケロケロ

カエル3
せつかくの平和な森が、私達の家が……

カエル2
カラスのせいで台無しだなあ……

カエル1
あ、日が沈む、ケロケロ明日のことは又明日。

一同
ケロケロ

白ユリの哲子フラフラ前方に来て北斗の前にしゃがんでジツとする。

駅員
こいつは蝶にはならんよ。

哲子
いいえ、なりますよ、白くておおきな立派な蝶に。
蝶
吸わして貰うよ、蜜。

と白ユリの背後から抱きかかえようとする。

駅員
おい、こちら。

いつのまにか元のさくらの服装にもどった野バラ1がいる。

野バラ1(さくら)
ダメよ、起こしちゃ、そつとしといて。

蝶(鈴木)
え？

野バラ1(さくら)
まだ眠ってるのよ。起こしたら大変なことになるもの。

引越し屋の男が現れる。

男
電話鳴ってますよ。

蝶(鈴木)
まだいたのか君は……

男
帰りかけたら鳴ったんですよ。鍵も開いてますよ。

蝶(鈴木)
ちよつと行ってくる。

と蝶の扮装のままの鈴木退場する。

カエル達

ケロケロケロ カエロ。

とカエル達帰っていく。

と明かりが変わり元の屋上に変化していた。

いつのまにか元の服装にもどった石原両手を広げて苦しんでいる。
哲子は植物園の横にしゃがんでジツとしている。

(石原に)どうかしましたか？

いや……別に……

とにかく、電話お待ちしてますから……あの……するんですよね、引越し……

さくらとみずほ顔を見合わせる。

みずほ

あの……一応名刺を……

みずほ

ええ？

電話しますから……

電話貰ったから来たんですけどねえ。

とポケットから名刺を取り出して渡す。

男

別にいいけど。

と去っていく。辺りは何事もなかったかのようにシンとしている。近くを通る電車の音、家族はそれぞれの場所でジツとしている。

みずほ

父さん、引越しようするの？

石原

母さんに聞きなさい。

みずほ

……母さん……

と哲子に近づく。

さくら

みずほ、

みずほ

でも……

さくら

来月になったら次の人入ってきちやうのよね。荷造りしなくちやいけないわ、私達。電話してみずほ、やっぱり今日見積もりして貰わなくちや。

みずほ

父さん。

石原

……

みずほ

母さん……

さくら

ダメよお越しちや。私達だけでやるのよ。

哲子

どこにも行かないわよ私は。

みずほ

母さん。

哲子

何よあなたは、あなた北斗と同じ部屋でしょ？どうして止められなかったの？あなたあの子の兄さんでしょ？判らなかつたの？おかしいわよ。あたしはここにいる。ずっとここにいる、北斗の側にいる。

石原 どうしちゃったんだ、母さんは……何言ってるんだ……

さくら 父さん、北斗は死んだのよ。

え？

さくら 逃げないでよ父さん、こんな時ぐらい逃げないで、ちゃんと私達を見て下さい。

みずほ さくら。

さくら 私達ちゃんと話をしなくちゃ。北斗のためにも。

石原 北斗は風邪で寝てるんだらう？明日の朝になりや、ここからこうやって手を振るんだらう？「いつてらっしゃあーい！」って。……「いつてらっしゃあーい！」

と大きく手を振って北斗のマネをする。

さくら 北斗は神の子じゃないもの、一日おきに生の国にもどってきたりはしない。帰らないのよここには。

そして、それを自分で選んだの。

石原 ……何があつたんだ……判らない。そんな馬鹿なことがあるか……

さくら 私達、引越しするのよ。しなくちゃいけないのよ。次の人達が来るのよ、私達の部屋に。

出て行けばいいわ。出て行きたい人は。私はここに残りますから。

……

さくら ……

あたし今、立ってるのがやつとよ。話すのがつらいの。当たり前前のことを話すのが……この人達は何？

どうしてあたしがこんなこと話してるの？

みずほ 後にしようさくら、今はまだみんな普通じゃないんだよ。

さくら

後つてどれくらい後？この人達が死んでしまうまで？普通じゃないつて……じゃあ今までは？私達
きつと前から普通じゃなかったのよ。じゃなきゃ、北斗はここに居るはずよ。

哲子

あたしのせいだつて言うの？あたしはあの子に捨てられたんだつて……あの子だけだったものね、あ
たしの言うこと黙つて聞いてくれるの……

さくら

母さんはこんな時でも自分のことしか考えられないの？私は北斗のこと話してるのよ。
……

みずほ

僕、スーパー行つてくるよ。もうお昼過ぎちやつてるし……カレーでいいよね。
作りたくないわ。

みずほ

僕が作るんだよ、簡単なんだから……出来たら呼ぶよ。
食べたくないわ……

みずほ

……
あんたおなか空くの？こんな時に……

みずほ

……

さくら

みずほはね、北斗と同じ部屋になんかいなかったわ。朝方までバイトしてたもの、知つてたんでしょ？
母さんだつて。みずほはもう長いこと学校なんて行つてない。

さくら

さくら、
父さんだけよ、何にも知らないの。

鈴木がスーツを着た女を連れて現れる。女は名もない花に似ている。

鈴木

林先生だ。

林
林です。

と深々とおじぎをする。

一同
……

鈴木 北斗の担任の林先生だよ。今電話があつて駅まで迎えに行つてきた。

林 この度は本当に……何と申したらいいか……

一同
……

鈴木 哲子、下で話そう。先生にお茶でも差しあげて……

林 いえ、お構いなく……

鈴木 石原君、

石原 ……

鈴木 哲子、失礼じゃないか、一緒に下に来なさい。

哲子 私はここにいるわ、部屋にはもどらない。

鈴木 哲子。

哲子 ここにいなければならないのよ、もつともつと苦しまない……私は私を許せないの。

鈴木 ……

鈴木 林 これは、北斗君の靴ですね。

と隅に並べてあつたズックを手取る。

林 ここから飛んだんですね……あの……何か私にお尋ねになりたいことないんでしょうか……。

一同 ……

林 私、恐くて……あれから皆さん何もおつしやらないので、私それで来たんです。何を聞かれてもいいように、毎日色んな事を反芻してました。どんなことでも……何か聞いて下さい。

一同 ……

林 前の学校でいじめがありましたて、亡くなった子供の遺書で判ったことなんです……親御さん達が担任を取り囲んで泣きながら責めてました。私は教員になりましたから、まるで人事みたいにただ見てただけでした。こちらは、石原さんも教員をしてらっしゃるから、それで黙ってらっしゃるんでしょうか……北斗君の作文、お父さんは特急列車の運転士というのが印象深く、私も昨日調べ直すまで忘れていたんですけど。

石原 それは伯父です。列車の運転をしていたのは、事故で死んだ私の兄貴です。

林 そうでしたか……星の心臓というのは？

石原 え？

林 お父さんに、宝物の隕石を貰ったと書いてあったんですが……。

石原 知りません……

林 明るくてサーブス精神の旺盛な子でしたから、作文じゃなくて、物語を作ったんですね。「僕のお父さん」という物語を。読まれなかったんですか？作文。

石原 はあ……。

林 北斗君の作文は、これまでも何本か選ばれて、文集にも載ったはずですが。家族みんなが喜んでくれたって私は聞いてますけど。

さくら 北斗は学校の話はしませんでした。そう……自分からは何も話さなかったわ。

鈴木 北斗はいじめられてたんですか？

林 そういうことはないと思うんです。でも判りません。私、全然、あの子のこと理解してなかったと思うんです。クラスの人気者でしたし、色んなことを進んでやってくれる手のかからない子で、何か問題が起きると、私、逆にあの子に相談ののって貰ったりしてたんですから。どうしたらいいんでしょう私……やっぱり責任ありますよね、私。

石原 ……死んだのか……北斗は……。

一同 ……

石原 バチですか？私、バチが当たったんですか？でも、何のバチなのかなあ……

林 ……話さなくていいんですか？北斗君が学校ではどんな子だったのか。どんな風に発言し、どんな時に笑い、どんな事に興味を示したか。誰と仲が良く、クラスのみんなにどう思われていたか。あの日の前日、私が北斗君を叱ったりしなかったのか、何か気に病んでいたような素振りはなかったのか、私が北斗君をどう思っていたのか……何か訊いて下さい。何でもお話ししますから。早く話してしまわないと、私、どんどん作ってしまいそう。自分の都合のいいように誇張して、北斗君を作り変えてしまいそう。訊いて下さい何か。

哲子 聞いたって仕方ないわ、北斗はいないんだもの。聞いたらあなた、楽になるんですか？楽になってどうするの。何も変わらないのに。

鈴木 下で話そう、石原君。

石原 作文にも書かれない父親が、人の子に物教えるなんて滑稽ですよねえ……

林 先へ先へと、人の心を読んでく子でした。何を讀んだのかしら、何を讀み違えたのかしら。

林、屋上から身を乗り出して下の街を見渡す。

と女子高生(カエル3)が走ってくる。

女子高生

屋上だ！物干し台もあるよっ！

中年の夫婦(カエル1・2)が登場する。

妻 あらあら広いねえ、明るいねえ。どうもどうも、ちよつといいですか？あんた！

夫 ほう、いい眺めだなあ……。あれが都庁か？

妻 あれはサンシャイン60ですよ。

夫 プリズン跡か、変わったなあ東京も……。

妻 来月越してくるんで、ちよつと下見に来てみたんです。間取りだけ見て決めちゃったもんだから、ここ安いですものねえ。安いわよあんた屋上もあって、日当たりも良さそうだしさあ、でも台所思ったより狭かったわね。

夫 何だよお前も入ったのか？

妻 だって鍵開いてたんだもの、あんたがトイレ借りたといって騒ぐから。

夫 ガマンできなかつたんだよ。

妻 だからあたしもついでにね、下見させて貰ったわよ。

夫、懷中からトイレトペーパーを出す。

妻

あんた！

夫　うち、切れてただろ？

妻　返してきなさいよ。

夫　今さらダメだよ。もしトイレに入って返そうとした途端に先方が帰ってきたらどうするの？泥棒と間違われて騒がれでもしたら。

妻　そうか……。

女子高校生三輪車を乗り回している。

妻　その子！やめなさい！壊しちゃうでしょ！ホラ壊れた。

その子取れたハンドルを持ってキョトンとしている。

妻　黙ってそこに置いて、こっちは来なさい！そんなオンボロ三輪車触ったら、こっちは壊したと思われるやうでしょ？

その子ハンドルをそっと置いて、夫婦の側に戻ろうとして隅のサッカーボールに気付いて遊び出す。

夫　なんだ、下手くそだなあ。

と夫がボールを蹴り始める。

夫
こうやるんだよ。

と一人で遊び始める。

その子
お父さんずるい。

妻
あんた！仲良くねっ！

夫へディングでその子に返してやる。

妻
静かに遊びなさいよ静かに、邪魔にならないようにね。

と妻も一緒になって蹴り始める。三人器用に人のいない所にボールを通し遊んでいるが、その子
勢いあまってボールをフェンス越しに落としてしまう。

全員
ああ！

妻
だから言ったら！人のもの勝手に触っちゃいけないって。その子拾って来なさい。
その子
車に轢かれてペチャンコ。

と下を見ている。

夫
仕方ないよ。

妻 そうね……。

その子 今度は北斗の植物園を見つける。その子開ける。

その子 可愛い。

と目を光らせる。

夫 どれどれ。

妻 あらあら、箱庭みたいだねえ……あ、何か動いたん？

とビニールをめくろうとする。

さくら さわらないで！

三人驚いて振り返る。

さくら あの……た、たいせつなものなんです。

夫 あ、そう。

とビニールをめくる。

その子

お父ちゃん、その子もこんな欲しい。

妻

ダメだよ、こんな手間ヒマかかっちゃって、どうせ母ちゃんに押しつけるんだから。

その子

ちゃんとやるからあ。

妻

ダメダメ、じゅ・う・し・ま・つ・も、うさぎも、猫も、みんな死んじゃったろ？お前が面倒みないからだよ。

その子

買って買って。

妻

これは売ってるものじゃないんだよ。誰かがここまで育てたものなんだから。オリジナルって奴なの

その子

これは。

その子

買って買って！

夫

いくら？

とさくらを見る。

さくら

……

夫

これ、売って貰える？

さくら

た、たいせつなものなんです。

夫

だからたいせつにするから。な。

その子

うん。

一同

……

妻 やめときなつて、にらんでるよ。どうせこの子すぐあきちゃうんだから、無理言つてゆずつて貰つてもさ、もてあますだけだつて。厄介だよ肥料だのなんだのお金もかかりそうだし。買って買って！

夫、その子をいきなり殴る。

その子 あーん。

妻 どうせここ越してくるんだもの、毎日見られるじゃないか、よそ様が苦勞して手入れたもんを、ただで楽々見られるなんて、得じゃないか？ね？

その子 そうかあ……

夫 お前、頭いいよなあ。

妻 ハハハハハ。

一同 ……

夫 なんかも暗いよなあいつら。(と小声で)

妻 変わりもんが多いんじゃない？さっきの部屋、異様にきちんとしてたもんね。台所なんか水滴一つ落ちてないし。畳にやゴミ一つ髪の毛一本見当たらないし、ピシッと片付いてて、余分なものが置いてないんだよ。本当に人が住んでるのかねえ、鑑別所だよあれじゃあ。白壁にはシミ一つないし、普通、カレンダーとか絵葉書きとか貼ってないかい？子供の落書き一つないんだよ。あそこに比べたらうちなんか、泥棒に荒らされた後みたいに見えるちゃうねえ。

夫 だらしないんだよお前は。

妻 それで気にならないあんたがだらしないんだよ。

夫　　そうか。
 二人　　ハハハハハハ。
 その子　　書いてきちゃった。
 二人　　え？
 その子　　応接間の壁に大きく「ひろし命！」って。
 ……
 その子　　お父ちゃんその子は字がうまいって言ってたじゃない。
 妻　　誰だよひろしって。
 その子　　家によく遊びに来るじゃない。
 夫　　あああの軽そうながキか。
 妻　　だめだよあんなのと付き合っちゃ！
 その子　　もうしばらく会えないんだよ、少年院行ったから。だからきれいに書いたよイラスト入りで。
 夫　　そうか血は争えんな。
 妻　　え？
 夫　　俺も書いてきた、トイレの壁に、まさ子命って。
 妻　　誰よまさ子って！
 夫　　バカ。
 妻　　あ、あたしか、ハハハハハハ。
 ……
 一同　　消して来なさいよ早く！
 妻　　もし戻って消そうとしているところに、先方が帰ってきたら……。

妻 泥棒と間違えられちゃうか。

夫 仕方ないよ。

妻 そうね。

その子 お腹空いたあ。

夫 もうこんな時間か。

妻 食べよ食べよ、ほら、ちようどシートも敷いてあるじゃないか。

と石原家のシートに座る。

妻 皿まであるよ。あんた！

夫 持っていた包みからおにぎりやらおかずやらを取り出して並べる。妻、石原家の皿におかずを取り分ける。その子出したそばからおにぎりとおかずをどんどん食べていく。夫もガツガツ食べていく。

妻 母ちゃんの分残しといてよ。

と妻も食べる。

夫 お茶。



1996年の初演より

田中家食事シーン。座ってる3人。

左からその子（波野愛）、まさ子（渡辺えり子）、田中かず夫（内野智）

妻辺りを見回し水筒に気付き、勝手に注いで渡してしまう。グビグビと息もつかずに飲む夫。

さくら あのうち……。

妻 え？あんたも食べる？

とおにぎりを差し出す。

さくら

い、いえ。

妻 いい所だねここは……決めて良かったよ、ねえあんた。

夫 うん。

妻 あんた、手洗った？

夫 いいや。

妻 ウンチしたんでしょう？さつき。

夫 大丈夫だよ、昨日風呂入ったから。

妻 そうだね。その子、ガツガツするんじゃないよ、よく噛まないと太るよ、そうでなくてもデブなんだから。

その子 母ちゃんもね。

二人 ハハハハハ。

夫 おい、デザートは？

妻 ああシュークリーム、その子のバッグだろう？

とその子のバッグを勝手に開けると、心臓の形の石が出てくる。

夫
なんだこれ？

その子
あ、さっき下で拾ったの。

夫
変な形の石だな。

その子
心臓みたいでしょ。

夫
気持ち悪いな。

とその辺にポイと捨てる。

その子
あ、あたしの！

と拾おうとする。

妻
よしなさい、きたないよ。犬のフンかもしれないし。

林
北斗君のじゃないんでしょうか？

鈴木
え？

林
隕石です。作文に書いてあった星の心臓。

石原
星の心臓……

と林から受け取りじつと見る。

その子
それあたしのよ。

と石原から石を奪おうとする。
石原その手をねじり上げる。

石原
どこにあった。どこで拾ったんだ！

その子
その前の道よ、電柱の下に転がってたのよ、あくん。

鈴木
北斗の死体があったところだな。

哲子
死体なんて言わないで下さい。死体なんて。

林
北斗君、その石を抱いて飛んだんでしょか？

その子
あくん！

夫
放せよ！

石原
……

夫
手放せ、なんだよいい大人が！

石原、その子の手を掴んだままボーツと突っ立っている。

夫
なんだ、やるか？

と掴みかかろうとする。

石原崩れ落ちて泣いている。

夫 あ……
妻 あんた！
夫 俺やっつてねえよ。な、その子、父ちゃんやっつてねえよな。
その子 母ちゃあーん！

と妻に駆け寄りその膝で泣く。

妻 よしよしよし、しょうがないねえお父ちゃんはケンカつ早くてさあ。

夫 やっつてねえって。

さくら 下さい。

妻 え？

さくら その子の持つてる石。

妻 なんだよ人の娘呼び捨てにして。

さくら 違います。その子じゃなくてその子。

妻 あ、そうか、ハハハハ、その子！

その子 嫌あゝ！

さくら 石原です。

妻 え？

さくら あたし達石原です。

妻 ……あんた！

と夫を引つ張つて小声で何やら話す。
時々「表札」とか「玄関」とかが聞こえる。

夫 え？えええ？

とトイレに入った仕草などをして、あわてる。

妻 その子、石なんかいくらでも拾ってやるから、差し上げなさい石原さんに。
その子 いやあ〜！

夫 又いきなりその子を殴る。

その子 あ〜ん！

夫 その子から石をひったくり、自分の服で石を拭いたりする。

夫 いやあ石原さん、いいとこですなあここは。

と石原に石を持たせ、肩など叩いている。

妻 ほんとにねえ、きれいに使つてらっしゃるから、うちも助かりますう。来月からこちらでお世話にな

哲子
妻
ります田中です。
越しませんようちは、私はここにいますから。
は？

哲子 植物園の前に座りじっとしている。

夫
具合悪いんじゃないか？

と頭をさしてくるくるばあの形にする。

妻
ああ……

と興味深げに納得する。

その子、哲子に近寄って哲子をしげしげと見る。

妻
その子！

とその子連れ戻して取り繕う。

鈴木 妻
ほんとに躰けがなくなって……
石原君……

石原隕石を持って立ちつくしている。

石原
思い出したよ。これは兄さんの宝物だったんだ……

と列車の発車時刻を知らせるベルが鳴る。
後方暗くなる。

妻
あなた、そろそろ時間よ。(と別人になっている)

夫
ああ、荷物大丈夫か？

その子
うん。

と落ち着いた風情の別人になった三人、シートをたたんでリュックに詰めたりする。

その子
寒いかな。おばあちゃんどこ……

妻
そうね、雪が降ってるね。

夫
夫咳き込む。

その子
お父ちゃん大丈夫？

夫
ああ……

妻
ゆっくり休めば良くなりますよ。向こうには温泉だってあるし。

夫 すまんなあ。店の方もやっと軌道に乗ってきたとこだったのに……
妻 何言ってるの。お店の一つや二つ、いつだって立て直せますよ。生きてりやなんだってできるんだから。

その子笑っている。

妻 どうしたんだい？
その子 だってこれからは三人一緒でしょ？お父ちゃんとお母ちゃんといつも一緒にいられるんでしょう？嬉しくて……ごめんなさい。お父ちゃんの具合悪いのに。

夫 そうだな。三人一緒だな。田舎行ったら三人で映画館行こうな。

妻 どちらまで？

石原 え？

妻 おたくもブルートレインですか？

石原 いえ、僕は兄に会いに来たんです。特急の運転士なんです。（石原だいぶ若返っている）
夫 へえ……

辺りは駅のホームに変わっている。

夫 あ、列車が入ってきた。

運転士の格好をした富士夫が立っている。

石原 お兄ちゃん！
その子 乗ろう乗ろう！
夫 よし。おい。（とその子の肩を抱く）
妻 ええ。

と三人奥に消えていく。

石原 お兄ちゃん！

と富士夫のそばに駆け寄る。

富士夫 どうした愛人、もう出るぞ。

石原 お父ちゃんが……

富士夫 え？

石原 お父ちゃんが倒れたんだ。

富士夫 そうか……

石原 代わって貰えないの？お父ちゃん、お兄ちゃんのこと呼んでるよ。

富士夫 今からじゃ無理だな。もうすぐ時間だ。お前、ついててやれ。母さんのこと頼んだぞ。

石原 僕じゃダメなんだ。お兄ちゃんじゃないと。お父ちゃんはお兄ちゃんを待ってるんだ。

富士夫 ……

石原 お父ちゃんは僕が嫌いなんだ。お兄ちゃんじゃないとダメなんだよ。

富士夫 そんなことないさ。明日には戻るから。
石原 これ……

と隕石を差し出す。

富士夫 それは……

石原 これのことかい？お父ちゃんがうわ言で言ってたんだ。星の心臓って……富士夫の石を取ってきてくれって。これかい？

富士夫 ああ……

石原 いったってそうだ。お父ちゃんとお兄ちゃんの間には僕には知らない秘密がある。僕はいっだって仲間に入れて貰えない……

富士夫 そんな事思ってたのか……お前は興味がないだと思ってたよ。僕らの話に。

石原 話したかったよ僕だって！いっぱい話したいよ。だけど入っていけないんだ。相手にされないんだ僕は……僕は勉強したよ。勉強してテストで良い点とれば、お父ちゃんに褒められて気に入られると思っただよ。良い子になれば好かれると思っただよ。運動会でも一等だった。僕はお兄ちゃんより何でも出来たんだ。そうすれば好かれると思っただよ。でもダメだった。お父ちゃんはどうしたって、僕のことを嫌いなんだよ。お兄ちゃんじゃなきゃダメなんだ！

富士夫 お前は立派だよ。僕よりも父さんよりもお前はきつと、立派な父親になる。僕はダメだ。列車に乗ってりやそれでいいんだから。父さんだってそうさ。夜行列車を運転してるとね、闇と自分が一体になるのを感じるんだ。真暗闇を見つめながらジーツと神経を集中させるのは、そりゃ孤独なものさ。風の具合で突然乗降口がボタンと開いたりすると、ギョツとして飛び上がりそうになる。だけどね、徐々

にその孤独な闇が、自分の内側に吸収されて、自分がまるで、この宇宙の闇を飲み込んでしまったようだね、体が闇の一部になって、感覚が溶けるんだ。自分が小さな星になって黒く広がる宇宙を見下ろしているようだ。そんな孤独がね、どうしても好きなんだな。

石原
……

富士夫
ワクワクするのは、日の出の瞬間を駆け抜ける時、だんだん夜が明けていく風景の中で列車の力強いリズムを感じるとつい鼻歌が出そうになる。暗闇だけしかなかった線路の先に、季節の彩りが少しずつ浮かび上がってくると、「ああ、生きてるってこういうことか」ってね。そんな思いがこみあげてくるのさ。

石原
……僕は列車に乗れないよ、すぐに吐いちゃうんだ。

富士夫
お前にはお前の道があるのさ、父さんや僕とは違う道がね。

石原
……

富士夫
その石はね、魔法の石だ。願い事がね、叶うんだ。父さんはだからうわ言で言ったんだな。

石原
え？

富士夫
持ってたてやれ、父さんに。父さんはD51を運転したいのさ。

石原
ええ？

ベルが鳴る。白い服を着た人々があわただしく駆け込んでくる。

富士夫
出発だ。ついててやれ愛人、父さんの側に……

と消えて行く。



1997年の再演より
石原愛人（土屋良太）と兄、富士夫（武発史郎）

石原

お兄ちゃん！

石原石を持って立ち尽くす。

ホームをさくらが走ってくる。石原には気付かない。

舞台は二つの空間に分かれ、石原の周りで白い服を着た待ち人達が佇んでいる。

さくら

みずほ！みずほ！

みずほが隅にうずくまっている。踏切の側の線路際らしい。二人とも学校の制服を着ている。

さくら

バカな事考えないで。

みずほ

なんだよ、こっち来るなよっ！何もしてないよ。

さくら

飛び込もうとしたでしょ、今列車に飛び込もうとしたんでしょ？

みずほ

……

さくら

分かるわよなんでも、あんたが考えてることぐらい。やだやだ、だから嫌いよあんたなんか、大嫌い！あんたは私の歪んだ鏡。私の嫌などこばかりが映ってる。どうして強くなれないの？いつつも人の顔色ばかりうかがって、良い子振って壁紙みたいに自分を消して、どんな色にでも合わそうとしてる。何か言いなさいよ。ケンカも出来ないの？あんたは？

みずほ

もう消えたいんだ、もうどこにも居場所がない。どうやってもうまく行かない。いつだって嘘を付いてる。毎日毎日嘘ばかりだ。でもそこから逃げられない。本当の胸の内にあることを口にも出せない。だったら消えるしかないじゃないか。だめだよ、もう僕は……

さくら

どうしてそんなに恐がるの？私達一体何を恐がっているのかしら。私達色んな事を知っているわ、家族の中の色んな事を。だけど、それを口に出せない。口に出すと壊れてしまう事を知ってるからだわ。そうよ、私達が恐いのは、私達のせいで家族が壊れてしまうことなのよ。だから、バカみたいに素直な振りを装って、髪の毛みたいに細い糸の上を歩いている。落ちないように、足の指先から頭のとっぺんまで緊張させて。

みずほ

ずるいのかな、僕ら本当はずるいんじゃないのかな……

さくら

又、そうやって自分を責める……もうやめよう、一人になるのは……私もやめるから、自分はきつと誰かの役に立ってるって、そう思うから……

みずほ

助けてくれるの？

さくら

え？

みずほ

僕を助けてくれる？

さくら

……

みずほ

僕はね、本当は憎んでるんだ、父さんも母さんも、嫌で嫌で仕方がない。それなのに離れられない。どうしてだと思う？こんなに憎んでるのに好かれないと思うのは……父さんは……母さんのこと知ってるんじゃないかと思うんだ。知ってて知らない振りをしてるんじゃないかと思うんだ。夜中に僕はこっそり鍵を開ける、朝方母さんが家に帰ってくるからね。酔っ払った母さんの洋服を脱がせ、そっとベッドまで運んで寝かしつける。奥の部屋から父さんのいびきが聞こえる。僕はホッとして自分の部屋に帰る。母さんの隣のベッドで寝ていたさくらが、起き上がって母さんの着ていた物を洗濯機に入れる音がする。匂いを消さなきゃいけないからね。父さんと違う別な男の匂いをね。タイマーを入れておけば、七時にはもう仕上がってる。僕らの完璧な連携プレーだ。朝起きると、母さんは何事もなかったように朝食の準備をしていて、父さんが御飯を食べてる。「お早うございます」僕は

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

みずほ

さくら

並んで挨拶する。そして急いで屋上にあがって例の儀式を済ませるんだ。下に降りると母さんは変貌している。僕らを絶対に寄せ付けない、何か特別な光線を体から放ち始める。酔っ払った母さんはあんなに僕らに甘えるのに、シラフの母さんは、固くて冷たい氷のようだ。母さんが受け入れるのは北斗だけ。北斗はいつだつて母さんの愚痴を黙って聞いている。母さんは僕らのことには見向きもしない。

……
北斗は父さんと似てないよね。僕らとも……

何が言いたいの？

北斗は母さんが、復讐のために生んだ子じゃないのかな……

復讐？

父さんに対してさ。母さんを愛さない父さんに対しての。

……

北斗は死んだおじちゃんにそっくりだ……そして父さんはそれを知っているんじゃないのかな……

父さんは、北斗が好きだわ。

自分に似てないからね。

北斗が誰だつて、私達、北斗が好きだわ。

北斗がいるから、僕らはまだ壊れない。

北斗がいると、あたし達、何となく家族になれるのよ。身勝手な人間同士が、父や母や兄や姉に変装できる。

叱ったり、威張ったり。

かばったり、押しついたり。

少し自分から自由になれる。

さくら
みずほ

小さいものに寄りかかつて、少しは自分が大きいものだと思いたいんだわ。言ってしまったよ色んなことを、聞いてみたいよ父さんや母さんに。本当の事の色々を。何が見えないのか、僕らのどこがいけないのかを。

さくら

細い糸を渡って行くのよ。私達いつもドキドキしてる。そしてね、それがもう癖になってる。みずほ、私達、その癖から逃げられないのよ。

みずほ

……

さくら

ダメよ、先に行っちゃ。

みずほ

……悲しそうな顔だ……さくらの顔。

さくら

私達……一緒よ。

二人自分を抱きしめるようにいだき合う。

先程からホームにいた白い服を着た人々が一人ずつ消えて行き、逆の方から黒い喪服を着た人々が一人ずつ現れていた。駅のホームは葬列の人々であふれる斎場と化していた。

みずほ

固いね。冷たいね。

さくら

鏡みたいに。

喪服の人々列になり二人の前を通り過ぎる。みずほとさくらもその列に加わる。葬列の奥で石を持って立っている石原に向かって北斗が走って来る。そして手を伸ばす。石原、北斗にその石を手渡す。あざやかな笑顔の北斗。石原と北斗手をつなぐ。そして二人で歩き始める。喪服の着物を着た哲子が客に挨拶している。その前を石原と北斗が手をつないで歩いている。二人哲子に気

が付く。

石原
哲子。

哲子が振り向く。

石原
誰か……死んだのかい？

哲子には北斗が見えていない。

哲子
……

にぎやかだなあ……父さん昔から葬式はダメなんだ。なんだか口がね、口がゆるんできて、笑っちゃいそうになるんだなあ。不謹慎だよ。なんでかなあ……人が大勢集まるから、妙に嬉しくなっちゃうのかなあ……

北斗も笑っている。

哲子
あなた、私が好き？

石原
何言っただ子供の前で。

哲子
……

と後ろに並んで焼香の列を作っていた黒い人々突如として北斗に襲いかかり、北斗を持ち上げむさぼるように闇の中に消して行く。

石原 あっ！

と石原北斗の手を離す。

石原 北斗、

北斗手を差し出して石を石原に手渡す。

石原 北斗っ！

哲子号泣する。カエルの声がする。

声 ケロケロケロケロ

黒い人々気が付くとカエルに変わっている。そしてケロケロ歌って踊っている。

石原 北斗っ！

かまびすしいカエルの声。星の心臓を持って立ち尽くす石原の周りを喪服を着たカエル達がピョ
ンピョン踊っている。

石原

これが心臓です。さあ、よく観察しましょう！ドクドクいつてますね？こうやってメスを入れておな
かを開いてもカエルはまだ生きています。皆さんの心臓もそうです。では、心臓を包んでいる
膜を注意して、ピンセットとメスで破いてみてください。はい、そうですね。これが本当の心臓の形
です。それでは、心臓の一分間の心拍数、収縮の順序を調べてみてください。後で心臓を切り離します
ので、傷をつけないように注意してやって下さい。次にカエルの口にストローをいれて空気を送り込
んでみてください……

と石原脂汗をかきながら理科の実験の授業を必死で続けている。その周りで狂ったように踊るカ
エル達、いつの間にかカエル達は哲子と、さくら、みずほの三人と入れ代わり、カエルになった
家族が石原の周りで飛び跳ねている。その中からカエル1・2・3が元のカエルの衣裳で現れる。

カエル 2

カエル 1

カエル 3

カエル 1

カエル 3

カエル 2

カエル 1

こいつの心臓固いな。

まるで石みたい。

ねえ、解剖した後どうするの？

まだ動いてる。

元に戻せるの？

ダメだろ、心臓取り出したんだから。

でもまだ動いてる。

カエル2 生物の慣性だろう。捨てるぞ。

カエル3 え？

カエル2 死体を捨てるんだ。

カエル1 まだ動いてるのに？

カエル2 いいから！

カエル1・3 うん！

と三人石原を背後から押さえ付ける。

「待って！」と声がして脱皮して青い服を着た北斗が現れる。

北斗 待って！それは僕の心臓だ。

カエル1 これは今解剖したカラスの心臓よ。

北斗 それならそれを僕に下さい。

カエル3 蝶になれないイモ虫が、これを何に使うの？

北斗 この心臓には魔法がかかってて、願い事が叶うのさ。だから僕は父さんを生かそうと思う。父さんはもう一度生きるんだ。

石原 バカ！お前が生きろ！

北斗 ハハハ。もう術がかかったよ。

カエル1 何よ、せっかく一番重い罰だったのに。

カエル2 又やればいいさ、案外面白いもの解剖。

カエル1・3 ケロケロ

カエル達奥に消える。自由になった石原、北斗の側に駆け寄る。

石原
北斗！

北斗
すごいだろこの心臓。

石原
良かった！

北斗
え？

石原
お前がね、死んだ夢を見たんだよ。もうこりこりさ。なんで見たんだろうあんな夢。考えたらお前が死ぬわけなんてないものねえ。良かった嬉しいなあ。

北斗
……

石原
これは兄貴に貰ったのかい？

北斗
ああ……

石原
何で作文にあんな嘘書いたんだ？父さんのことそんなに嫌いか？

北斗
小さい頃、おじちゃんと約束したんだ。夜行列車の機関士になるって。

石原
石原気難しい顔になる。

北斗
ほら、父さんはすぐに嫌な顔をする。僕が列車の話をするといつもそうだ。だから僕は話すのをやめたんだ……おじちゃんがおじいちゃんと二人で列車の旅をした話を聞いて、僕は羨ましかった……だからね、僕は父さんを機関士にしてその運転席の隣に座らせて貰った。作り話の作文の中でね。僕はほんとにはね、乗りたいかったんだ。一度でいいから父さんと深夜特急に。

石原
そう言えばよかったんだ、どうして言ってくれなかったのさ！

北斗 悲しい顔をするんだもの。僕が話そうとすると、みんな悲しい顔になる。だから僕は、僕ではいられなかったよ……

石原 ……

北斗突然石を自分の胸にあて苦しそうな顔になる。

石原 どうした？北斗。

いつの間にか森の一同が取り囲んでいた。

駅員 脱皮するぞ！

北斗の胸の心臓が光り始める。

北斗の口からおびただしい血が噴き上がる。

石原 北斗！

一同 ああ！

カエル2 青大将だ。

蝶 こいつへびだったんだ。

音。立ちつくす石原。

さくらの声がして前方明るくなる。屋上。

さくら

ベリベリとイモ虫の皮膚ははがれ、肉は裂け、ドロドロした体液がそこら中に飛び散りました。そしてその肉の裂け目からヌメヌメした青い皮膚の生き物が首を出し、イモ虫の肉や臓物を千切りながらスルスルとところてんのように押し出されて、太く、長く、伸びていったのです。

「青大将だ！」誰かが叫びました。そう、脱皮したのは青大将だったのです。青大将は、元の自分の体をきれいに食べ尽くしてしまおうと、どんどん大きく肥大していきました。

そして、夢を見るようにうっとりとその様子を眺めていた森の生き物達を、次々と飲み込んで行っただけです。森は静かになりました。全ての生き物も植物も、青大将に食べられてしまったからです。青大将の体は前よりも大きく、そして固くなっていました。青大将が一つため息をつくときそれは白い煙になってポーツと言いました。次の瞬間、青大将は、自分の体が飛んでいるのに気が付きました。下には裸の森が見えました。青大将は泣きました。せつかく友達になろうと思った森の仲間達を自分が食べてしまっしかなかった事が悲しかったのです。

ひとりぼっちになった青大将は、泣きながら空に向かいました。どんどんと高く、高く、暗い宇宙の星々の間を、高く高く飛んでいきました。その姿は、夜を駆け抜けるブルートレインのようでした。

気が付くと前方の植物園の前に哲子が座り、その横でみずほが北斗の文集を開いて読んでいた。

さくらは暗記した北斗の作文を読んでいたのだった。

みずほ

この植物園の世話をしながら、北斗は毎日、そんな物語を考えていたんだな、自分の思い通りの国を作って、遊んでいたんだな。そして、その国も捨ててしまった。北斗はもっと生きたかったろうにな

あ……。

さくら

あたし達を飲み込んで、北斗は一人で行ってしまった……。

哲子

……いつだったか、私の枕元に花丸のついた作文が置いてあった。私は、その作文をろくに見もしないで北斗の机に返したんだわ。そして次の日北斗が「母さんどうだった？」って聞いた時、私は「何が？」って言ったのよ。「何が？」って……北斗は黙ってニヤニヤしてた。そして「何でもないよ」って笑ったから、私「うるさい子ね」って言ったのよ……。

石原

カア！カア！

みずほ

どうしたの？父さん。

石原

……何でもないよ。

みずほ星の心臓を取り出して眺める。

みずほ

これは、何なのかなあ。

石原

それは、父さんが貰った心臓だ。

みずほ

え？

石原

北斗がくれたんだよ。さつき父さんに。

と大事そうに受け取る。

さくら

何言ってるの？父さん。

石原

願い事が叶う心臓なんだ。

と石を抱く。と一景のD51の近づく音がする。
舞台前方明るくなると与一、富士夫、北斗が、眠るように線路に耳を押し当てていた。

北斗 ほんとだ、すごい音だ！
富士夫 来るぞ！

と三人大きく飛びのく。三人汽車の進行方向に身を乗り出し、大きく後方まで身を回して行く。

与一 止まった。

富士夫 父さん、D51が青列車を引いてるぞ。

与一 ほんとだ、ブルートレインだ。

富士夫 北斗、これは、君が生まれた年から走り始めた「北斗星」って名のブルートレインだぞ。

北斗 ほんと？

富士夫 ああ、君の名はこの列車の名前さ。君はこれに乗りたいって言ってたね。

北斗 うん。

富士夫 父さん、運転するだろ？

与一 勿論だ。

北斗 あ、誰か乗ってる。いっぱいいるぞ。

乗客達降りてくる。カエル達である。

音楽。

カエル 1

♪いつからかしら歌ってた

あの空の星と同じように

まるで変わらない きのう 今日 明日

誰のために 何のために

歌う歌なのか

何かを待つでもなく

待たれる訳でもなく

誰かが聴くでもなく

聴かせる訳でもなく

いのちをふるわせる

どこから来てどこに行くのか

いつからかしら歌ってた

けれどまたたく星の中

星の破片が燃えながら

一つ流れて落ちたよう

考えが空から 誰かの瞳に宿る

どこから来てどこに行くの

考えが空から

それは誰の夢

星と同じ歌 歌ってた

北斗、石の心臓を抱き、作文の物語の登場人物達と遊び笑う。

カエル2 早く出かけよう。

カエル3 出かけよう。

一同 ケロケロケロ

与一 よし。さあ、行こう！

北斗 目が覚めたら、別の国だね？

与一 ああ。

三人、機関室に乗り込む。

富士夫 出発します！

笑っていた三人、機関士特有の真剣な顔になり、各々の持ち場につき、出発する。号令をかける与一、石炭をくべる富士夫、与一の号令を繰り返す北斗。列車の通過する音。

屋上。

愛人、哲子、さくら、みずほ。手荷物をもって後ろの空を見上げている。まるで北の空の北斗七星を見上げているようである。

間。

引越し屋の店員が顔を覗かせる。

店員の男

あろう、もう出ますけど。

一同ゆつくりと店員を見る。

店員の男

荷物、もういいですね。じゃ又あちらで。

と出て行く。

間。

さくらとみずほ出て行く。哲子ゆつくりと向きを変え植物園を改めて見る。そして出て行く。それを追いかける石原。
少しの間。

一景と同じ場所に星の心臓が置かれている。心臓光り始める。

別々の方向から、さくらとみずほが駆けてくる。そして星の心臓に手を伸ばそうと互いに気が付く。

そしてゆっくり星の心臓を見つめる。

舞台暗くなる。

E
N
D

【参考文献】

- 「機関車に憑かれた四十年」……………著者／向坂唯雄
「ベテラン機関士の労働と生活」……………著者／福原力三
「旅」1994年12月号（JTB）運転士の談話
「鉄道廃線跡を歩く」……………編者／宮脇俊二
「藤井旭の天文年鑑1996年版」
「星座」……………著者／斎藤文一・沼澤茂美・脇屋奈々代
「星座と神話はどこでめぐりあったのか」……………著者／小尾信彌
「中学一年コース2月号」（学研）
「NHK高校講座現代社会」
「犠牲―サクリファイス」……………著者／柳田邦男
「弟の戦争」……………著者／ロバート・ウエストール
「くろ真史詩集くぼくは12歳」……………編集者／高史明・岡百合子
「アダルトチルドレン―自信はないけど、生きていく」……………著者／西川明
「心のおもむくままに」……………著者／スザンナ・タマーロ



1996年の初演より、ラストシーン。星の心臓に手を伸ばす、さくら（杉嶋美智子）とみずほ（樋口浩二）

『死者を語ること』

渡辺真紀夫

もしも肉親が死んでしまったら、そして、その肉親が我が子で、しかも自ら命を断つたのだとしたら、親や家族の悲しみや悔恨はどれほどだろうか。石原家の人々は息子である北斗の自殺という事実を認められない。北斗の死という事実は、石原家にのしかかり、痛ましい生活が続く。

劇の終盤で、北斗は、自殺という事実を苦しむ石原に「術」をかける。「この心臓には術がかかって、願いたい事が叶うのさ、だから僕は父さんを生かそうと思う。父さんはもう一度生きるのさ。」北斗の術によって、石原家は死の呪縛から解かれるように見える。

死者が生きている者たちにかける「術」とはなんだろうか。

北斗の死後、北斗の死から逃れようと、その死を認めたくない石原家の様子について、北斗の姉のさくらは言う。「……おじさん、あたし達、あれからちつとも話をしないんです……」

「ないのよ、話なんかもうないの。」

石原家に現れる北斗の担任教師が言う。

「話さなくていいんですか？北斗君が学校ではどんな子だったのか。どんな風に発言し、どんなときに笑い、どんな事に興味を示したか。誰と仲がよくて、クラスのみんなにどう思われていたか。あの日の前日、私が北斗君を叱ったりしなかったのか。何か気に病んでいたような素振りはなかったのか、私が北斗君をどう思っていたのか……何か訊いて下さい。何でもお話ししますから……」

その問いかけに母親の哲子は、

「聞いたって仕方ないわ、北斗はいないんだもの。聞いたらあなた、楽になるんですか？楽になつてどうするの。何も変わらないのに。」と対立する。

そして、その対立は、北斗の「術」によって解決する。石原は初めて北斗の機関車へのあこがれを聞き、自分の思い出と重ね合わせる。母親は北斗の思い出を語り始める。北斗の作文が朗読され、創作の世界が語られる中で、母親は眠りから覚めたような口を開く。

「……いつだったか、私の枕元に花丸のついた作文が置いてあった。私は、その作文をろくに見もしないで北斗の机に返したんだわ。そして次の日北斗が『母さんどうだった？』って聞いた時、私は『何が？』って言ったのよ。『何が？』って……北斗は黙ってニヤニヤしてた。そして『何でもないよ』って笑ったから、私『うるさい子ね』って言ったのよ……」

そう語り終えた時、北斗は作文の通り、カエル達やおじさんとともに空を駆け、彼の思いは完結するのである。

北斗を失った家族は死者を「語る」ことで死を認め、初めて新しい生活へ向かって旅立つことができる。観客は理解する。死者が生きている者にかける術とは、「死者を思い出すこと。死者の思い出を語ること。」なのだ。

渡辺の作品は舞台上で、登場人物によく死者について独白させる。例えば、『TEMPO』（1995年4月5日〜5月12日）では青木力が、旅芸人の奥さんだった母が、観客に殺された様子を、シンジに語る場面があった。「赤い靴」

1994年8月では一郎が、彼の一家の来歴と父親の死、母親の自殺について語る場面があった。「月に眠る人」(1993年6月)では、亀治の命名にまつわる一家の歴史を聞きながら、病床のマツが息を引き取る場面があった。1995年8月に再演された「風の降る森」では、オカラと化した遺体で村を救った英雄、テンジンギヤボの生涯や、自らの命を捨てて人々を救った牛の伝説が、明々と語られた。

ではなぜ、渡辺はそのように死者について「語る」ことにこだわるのだろうか。

歴史的に見て、劇場は異界への入り口である。別に劇場でなくても、例えば大傘をさして辻に立ち、ささらをすりながら「説教」を語った芸能者は、広げた傘の下がすでに異界であった。そこで語られる世界は、現実の体験をしたことと同等の衝撃を、見る者にあたえたのだった。日本の伝統的な「語る」芸能は、「此処に彼岸を出現させるといった技術」(「説教とから傘」山本吉左右著平凡社選書「くつわの音がざざめいて」より)であった。

乱暴な言い方をすれば、伝統的な「語る」芸能は死者を語り鎮め、この世の災いをなげぬように、無事彼岸へ立ち去つてもらったものであった。渡辺は伝統的な作品の動機、「舞台上に死者を、あるいはやがて死ぬべき人間を登場させ、その無念を美しく再生すること」によって劇を作っているように見える。伝統的な舞台と渡辺の意図との接点が、「語る」ことなのではないだろうか。

「深夜特急」の冒頭の美しさ、懐かしさは印象深い。客席の電灯が落とされた瞬間から、舞台上では思い出が軽々と時間をこえてゆく。幼い心が「星の心臓」に見立てた石(空の星)への幼いあこがれとしての流れ星と、「血」を送り出す内臓としての心臓と、肉親の血脈や列車事故で飛び散る肉片や、解剖されてなお脈打つカエルの心臓が重ね合わされる。(手を取る度、肉親にまつわる思い出は生き生きと動き出し、死者達は思い出の中の年齢のまま、語り合う。(幼いまま死を選んだ北斗は、その思い出の死者の中では幼い役を与えられる。観客たちは談笑する死者を見るのだ。時間を跳び越え生き生きと語り合うのは、死者でなくても観客各々の記憶の中の幼い自分自身と、まだ年若い肉親の

記憶であつてもいっそうに差し支えない。記憶の中の風景は、死者と同じく、現在は存在しないものだからだ。幼い自分自身と若い父親を組み合わせても、若い父と今の年齢の自分を組み合わせて談笑してもいいのだ。その美しさ、懐かしさは、現実の子を失った石原家の固くこわばった冷たさに対比される。

前作「TEMPO」では、死は真摯に受け止められ、家族を失ったシンジは何を見るのかという、家族を失う痛みや喪失感が描かれていた。そして、今回の作品では、肉親を失う家族の痛み「癒し」が与えられていると思ふ。

死者を「語る」ことで死者に思いを致すことが、その「癒し」なのだ。渡辺は言いたいのではないだろうか。「星の心臓」を手にする度に時間を軽々とこえる北斗、富士夫、与一の三世代の死者たちの懐かしさは、生き残るこの世の者たちの冷たいこわばりに比べて暖かな伸びやかさに満ちている。その生き生きとした様子は「死者」のものなのである。



1996年の初演より、3人D51に乗り込む。

【上演記録】

劇団300第28回公演



●初演……1996年2月8日(木)～2月25日(日) 24ステージ

●場所……新宿THEATER/TOPS ●キャスト……キヤスト・石原与一(駅長)・東銀之介 富士夫(駅員)・武発史郎

北斗(イモ虫)・富士夫の幼年時代/大谷桃子 石原愛人/土屋良太

哲子(谷間の白ユリ)/遊上良子 さくら(野バラ1)/杉嶋美智子

みずほ(野バラ2)/樋口浩二

鈴木靖夫(蠅)/遠藤靖 林(名もない花)/いしいまこ

引越し屋の男/溝上朗生 田中かず夫(カエル2)/内野智

まさ子(カエル1)/渡辺えり子 その子(カエル3)/波野愛

待ち人達(カエル達)/上野晴美 溝上朗生・友寄有司・星風太郎・久保内亜紀・黒田裕久



●スタッフ・作・演出/渡辺えり子 美術/和田平介 照明/中川隆一

音響/原島正治(囃組) 舞台監督/藤田秀治 振付/菅原鷹志

作曲・歌唱指導/深沢敦 編曲/山本ヒロアキ 衣裳/山本安規子

照明操作/上村啓子 音響操作/飯嶋智 絵画/市川伸彦 写真/室岡浩一

演出部/田中恵里・広瀬順一 制作部/佐藤友貴 制作/おふいす300

協力/横沢絵美・パイルステイツ・水内清光

長田克巳・尾松亮・中山有紀子・川床美乃・加藤元基・松山郁人・倉橋里衣・岡田朋子・金田浩樹・大内史子・玉城悟・浜本由美

声戸久利子・蟻坂裕美

劇団300第28回公演
「深夜特急」
あざみれい子の国
作・演出 渡辺えり子

1996年2月8日(木)～25日(日)
劇場 THEATER/TOPS TEL:03-3550-9596

日時 1996年2月8日(木)～25日(日)
劇場 THEATER/TOPS TEL:03-3550-9596

入場料 指定席 前売り ¥3,500 当日 ¥3,800
自由席 (指定席を希望する場合は、前席の人数) 前売り ¥2,500 当日 ¥2,800
※当日の座席状況は当日の劇場にてご確認ください。

チケットの取扱い
チケットの取扱い
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL:03-3550-9596

1996年8月 於：下北沢ザ・スナリ
作・演出 渡辺えり子

次回作品

劇団300第28回公演
「深夜特急」
あざみれい子の国
作・演出 渡辺えり子

1996年2月8日(木)～25日(日)
劇場 THEATER/TOPS TEL:03-3550-9596

日時 1996年2月8日(木)～25日(日)
劇場 THEATER/TOPS TEL:03-3550-9596

入場料 指定席 前売り ¥3,500 当日 ¥3,800
自由席 (指定席を希望する場合は、前席の人数) 前売り ¥2,500 当日 ¥2,800
※当日の座席状況は当日の劇場にてご確認ください。

チケットの取扱い
チケットの取扱い
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
TEL:03-3550-9596

「夢の翌日」

渡辺えり子

たった二歳の幼児の頃から、私は死ぬのがひどく恐かった。

近くの神社の境内でかくれんぼの鬼になってしゃがんでいると、辺りは日が暮れかかり、自分の心臓の音だけがドクドクと鳴っていた。「もういいかい！」ふりしぼった声が林の中にこだました。けれど返事がない。

泣き虫の私が、泣くこともできない暗い寂しさにおそわれたのはあの時からだった。

自分は一人なのだ。私という私、他の人ではない私というたった一人の私がここにしゃがんでいる。そんな感情を初めて知ったのがあの神社の境内だった。

そして、私という命の死が恐くなった。

あれから眠れぬ日を幾度重ねたことだろう。「孤独」という言葉を知らぬ頃から、いつかは死ななければならないという絶望感にさいなまれ、その感情が強迫観念となって、胸を縛り続けた。

中学の時、大好きな先輩が小児リウマチで死んだ。二十八の時、信頼し続けた芝居仲間が事故で死んだ。二年前、小学校時代からの親しい友人が癌で死んだ。愛するものの「死」の激痛はいくら時が経っても沈殿したまま重く臍物を縛る。

親しい友の手首には、自殺未遂の切り傷の跡が二本ついていて、それを見たのは高校の頃だった。絶望の淵を歩き、乗り越えた友人

をなぜ死はさらっていくのだろう。

「自死」、生きていかねばならない残された人の激痛と、死んでいかねばならなかった者の激痛を癒やす術は無いのだろうか？

消えた存在と、その事実を受け取り、記憶の拷問に耐えながら、新たな生命を生むことはできないだろうか？

死んではいけない。死んではいけない。

だが、死んだ者はどうして夢の中で、あんなにも鮮やかに優しく笑うのだろうか。

(一九九七年

再演時チラシより)



1997年再演より田中まさ子を演じる渡辺えり

劇団300第30回公演

劇団300第30回公演 「深夜特急」

あざめれば別の国

作・演出 渡辺 えり子

- 再演……1997年1月8日・26日・1月30日・2月2日・2月6日・11日
- 場所……新宿THEATER/TOPS・山形遊学館ホール・大阪扇町ミュージアムスクエア

●キャスト…石原与一(駅長)／東銀之介 富士夫(駅員)／武笠史郎 北斗(イモ虫)／富士夫の幼年時代／久保内亜紀
 石原愛人／土屋良太 哲子(谷間の白ユリ)／遊上良子 さくら(野バラ)／杉嶋美智子
 みずほ(野バラ)／樋口浩二 鈴木靖夫(蝶)／遠藤靖 林(名もない花)／いしいすみこ
 引越し屋の男／溝上朗生 田中かず夫(カエル)／内野智 まさ子(カエル)／渡辺えり子
 その子(カエル)／波野愛 待ち人達(カエル)／上野晴美 溝上朗生・友寄有司・星嵐太郎
 大谷桃子・黒田裕久・宍戸久利子・蟻坂裕美

●スタッフ…作・演出／渡辺えり子 美術／和田平介 照明／中川隆一 音響／原島正治(囃組) 舞台監督／藤田秀治
 振付／菅原鷹志 作曲・歌唱指導／深沢敦 編曲／山本ヒロアキ 衣裳／山本安規子 写真／室岡浩一
 宣伝美術／森内信一郎・小林亜希子 制作部／佐藤友布貴・岩間貴子 制作／おふいす300

東京公演
1997年1月8日(水)～26日(日)

開演 平日19:00 (日)14:00
 土・水14:00・19:00
 18(水)は19:00のみ
 一開場は開演の30分前
 劇場 THEATER/TOPS
 TEL.03-3350-9696
 全席指定 前売り¥3,500 当日¥3,800
 一般前売り開始 12月1日(日)
 チケットお取り扱い
 TEL.03-3332-2609
 TEL.03-5237-9988
 TEL.03-3250-9999

大阪公演

日時 1997年2月6日(木)～11日(火)
 開演 平日19:00 (土・日)14:00・19:00
 2/11(火)14:00
 一開場は開演の30分前
 劇場 扇町ミュージアムスクエア
 入場料 全席自由 前売り¥3,300 当日¥3,500
 一般前売り開始 12月8日(日)
 チケットお取り扱い
 扇町ミュージアムスクエア TEL.06-361-0088
 チケットぴあ TEL.06-363-9999
 扇町ミュージアムスクエア提携公演
 大阪市助成公演

著作 渡辺えり

表紙デザイン 濱田麦那（渡辺流演劇塾4期生）

印刷所 ちよ古っ都製本工房

発行日 2016年9月21日

作成・発行元 オフィス300

無断転載・転用・複製はご遠慮ください。

この戯曲を上演する際は、オフィス300に御一報願います。

オフィス300 TEL:03・6804・4838

メールアドレス: mai@office300.co.jp

オフィス300
夫いなる輪郭の輪を超えて